

阿片「モルヒネ」中毒者ニ對スル變質劑ノ治療成績

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/31052

阿片「モルヒネ」中毒者ニ對スル變質劑ノ治療成績

宏濟善堂救療所

黒井 忠 一

目次

緒言

一、阿片、麻藥ト其中毒

支那ノ阿片

阿片煙膏

阿片吸食

阿片癮者

「モルヒネ」中毒者

二、阿片、麻藥取締ト其批判

三、變質劑使用ノ動機ト療法ノ文獻

四、小澤氏變質劑ノ性狀性質

五、靜脈注射セル變質劑ノ排泄

尿中ノ沃度、砒素

唾液中ノ沃度、砒素

六、變質劑使用ノ臨床觀察

中毒者收容狀態

診療ノ方法

診察經過ノ大要

個々ノ症狀

臨床觀察ノ總括的考察

七、變質劑使用中ノ血液所見

赤血球

白血球

血色素

補體ノ測定

八、救療所收容患者治療成績

全治率ノ關係

中毒程度ト治療關係

體重ノ觀察

合併症ト治療中ノ主訴障害

治療退所後ノ觀察

生殖機能ニ就テ

職業ト治療トノ關係

九、小澤氏變質劑ノ他疾患ニ對果スル効

微毒ノ例症

軟性下疳ノ例症

淋疾ニ對スル試用

皮膚疾患ノ例症

内科疾患ノ例症

十、結論

文獻

緒言

麻藥中毒ハ本邦ニ於テハ、胃癰、喘息、其他ノ疼痛性疾患ニ、「モルヒネ」ヲ連用シタルニヨリ起ル例症ニ過ギザルモ、支那國ノ總テノ地方ハ、阿片又ハ「モルヒネ」、「ヘロイン」、「コデイン」、「コカエン」等ノ麻藥ヲ嗜好用シテ、或ハ之ヲ吸食(吸煙)又ハ注射スル風習アリテ其由來古ク、其狀恰モ邦人ノ茶、煙草ヲ用ユルガ如ク容易ニ中毒ニ陥リ、

日常麻藥ナク生活シ能ハザル者頗ル多シ。

麻藥中毒防止施設ハ近時麻藥ノ流行ニ禍セラル、米國ニ於テ、一九一五年十八萬七千ノ麻藥中毒存在ヲ推定シ、其頃既ニ紐育「ブラックウエル」島隔離病院ニ治療ヲ開始シ、一九二六年ニハ費府ニ麻藥ニ對スル社會教育運動ヲ起ス等中毒防止施設ニ汲々タリ。

世界最古ノ阿片國タル當地方ハ之等ノ施設運動ニ就テハ極メテ重要ナル問題ナルニ拘ラズ、救濟ノ美名ニ隠ル、賣名營利ノ徒輩ニヨリ唱導セラル、外見ルベキモノナカリキ。大正十三年關東州ニ阿片令ヲ施行シ阿片取締ヲ嚴ニスルト共ニ、法規ノ形式上阿片販賣人ニシテ實質上公設機關ナル宏濟善堂藥局ニ、經常豫算一萬七千圓ヲ以テ救療所ヲ設置シ其中毒者治療トシテ、小澤氏變質劑ノ靜脈注射療法ヲ採用シ今日ニ至レリ、今其成績ヲ茲ニ報告スルニ當リ一應阿片麻藥並ニ其中毒狀態ヲ述べ取締施設ノ實際的効果ニ對シ卑見ヲ附加セント欲ス。

一、阿片麻藥ト其中毒

支那ノ阿片

支那人ノ阿片麻藥使用ノ起原ハ明カナラザルモ、東周ノ敬王時代(西歷紀元前五—四七八年)ノ史述ニ「爰操刀將罌花之鮮艷高大者」トアルヲ以テ其時代既ニ罌粟ヲ栽培シ居タルコト明カニシテ、瑞西國土人ノ罌粟ヲ栽培シタル記述、地中海沿岸ノ栽培、希臘ノ「シオフラタス」時代藥用トシテ用ヒタル事實ニ比シ更ニ古キヲ思フモノナリ。

然レドモ之ヲ藥用ニ供スルコトハ、希臘人、亞刺比亞人ノ交易ニヨリ支那ニ傳ヘラレタルモノ、如ク、唐宋ノ時代大食國、亞刺比亞人トノ交易藥品中「爲安心神增飲食令人多眠之物」トナシ、初メハ罌粟粒ヲ丹石膀胱疾患、下痢疼痛性疾患ニ對シ、炙リテ用ヒ又ハ密ニ混ジテ使用シタル記載アリ、罌粟ノ汁ヲ集メ阿片トナシ使用シタルハ明ノ成王時代ナルガ如ク、明ノ時珍本草綱目ニ「俗人房中術用之」ト記シアレバ此頃既ニ娛樂用トシテ使用セラレタルモノト認ム

ルコトヲ得ベシ、而シテ阿片ヲ吸煙器具ヲ用ヒテ吸食スルニ至リシハ乾隆ノ頃（西紀一七三六—一七九四年）、病弱尼僧癰癩ヲ發シ起坐スル能ハザルニ徒々ノ餘リ、或時竹管ヲ空瓶ニ押込ミ誤ツテ瓶ノ底ヲ破リシヲ以テ、傍ニアル阿片劑ヲ塗り之ヲ火ニ炙リタルニ偶然異様ノ香氣鼻ヲ突キタルニ依リ、之ヲ試ニ吸入シタルニ忽チ心身爽快トナリ兩腿自由ニナリ歩行意ノ如クナリシヲ宣傳シ、各種ノ疾患ニ廣ク使用セラル、ニ至リシト云フ。

斯クシテ阿片吸煙ノ風習ハ疾病ノ治療目的ニ、又娛樂用トシテ漸次蔓延スルニ至リ、一六〇二年明朝萬曆三十年和蘭人「コルネリヤスポーマン」ノ東印度會社ヲ組織スルト共ニ、英國人對支貿易ニ力ヲ注グニ及ビ阿片ノ輸入激增シ、益々吸煙ノ風瀾蔓シタルヲ以テ清朝ニ至リ、雍正七年（一七二九年）阿片吸煙禁止令ヲ發シ後屢々法ヲ改メテ、禁止ニ努力シ一時吸食者販賣者ヲ死刑ニ處シタルモ更ニ停止スル處ナク、一八三九年阿片戰爭ニ破ル、ニ及ビ阿片ノ輸入ハ公然認メラレ、支那國ヨリ銀ノ流出夥シキ額ニ上レリ、依テ清朝ニテハ銀流出防止策トシテ國內ニ罌粟ノ栽培ヲ獎勵シ、一時阿片ノ輸入減少シタルモ阿片ノ生産増加シタル結果、却テ惡風習益々浸潤スルニ至レリ。

此ニ於テ清朝更ニ國內ノ阿片禁止ニ努力スルト共ニ、英國ノ印度產阿片輸入ニ對シ屢々抗議スル所アリシガ願ラレズ、日清戰爭後列國ノ勢力支那ニ延ビ阿片ノ輸入ヲ益々助成スルニ及ビ、排外反抗ノ現象トシテ禁煙運動トナリテ表ハレ宗教團體ノ援助ニヨリ、相當國際間ノ視聽ヲ索リニ至レリ。

一九〇六年ニハ清朝上諭ヲ發シ十年計劃ノ阿片禁絶制度ヲ宣明シタルガ、取締ノ實伴ハズ一八三九年阿片戰爭ヨリ一九一一年清朝ノ末期ニ至ル間、當時ノ值ニテ二十一億兩ニ達スルノ輸入ヲ見タリト云フ。

斯クノ如クシテ支那内地ノ阿片吸煙禁止ハ何等ノ効果ナキニ拘ラズ、列國貿易關係ヨリ阿片輸入ハ益々國際間ノ注目スル所トナリ、一九〇九年米國政府ノ提案ニヨリ上海ニ國際阿片會議ヲ開キ、一九一二年國際阿片協約成立シ締約國ハ支那ノ阿片輸入防遏ニ努力シ、東洋ノ殖民地ニ於テハ支那ノ內國取締法ニ準ズル取締ヲ爲スコト、ナリ、一九一三年（民國二年）中華民國トシテ新刑律ニ阿片煙罪ヲ定メタリ、更ニ一九一九年上海ノ關稅會議ニ於テ阿片ノミナラズ

「モルヒネ」、「コカエン」並ニ其誘導體ニ就テモ、合法の使用ノ目的ニシテ醫師、藥劑師ニ非ザレバ輸入スルコト能ハザル旨協定セラレタリ。

其後國際聯盟ニテハ一九二一年ヨリ一九二三年ニ亘リ、阿片委員會ヲ開キ支那ヲ中心トスル阿片麻藥類ノ不正取引ノ禁止ニ、援助セントシ遂ニ一九二五年補足事項ノ條約並ニ實施ニ關スル協定ヲ見ルニ至リ、從來ノ阿片麻藥取引年報ヲ正確ニシ阿片ヲ國家ノ專賣トシ、阿片煙灰ノ賣買ノ禁止ヲ加フル等、更ニ細目ニ渉ル監視ヲ要スルニ至レリ。

阿片煙膏

支那人ノ阿片ヲ吸入スルニハ必ズ生阿片(罌粟ノ實ニ剪ヲ以テ傷ケ出ヅル汁ヲ採取乾燥シタル黑褐色ノ塊)ヲ煙膏ニ製ス、煙膏トハ生阿片ヲ水ニ溶解(二―三磅ヲ水二―三立ニ)シ煙灰(吸食ノ際器具ニ附着スル灰ニシテ「モルヒネ」五・一八%ヲ含ム)半量ヲ混ジ、支那產ノ褐色ニシテ日本紙ニ似タル濾過紙數枚ヲ箆上ニ置キ濾過ス、殘渣(罌粟ノ莖、葉、實ノ皮片等)ヲ棄テ濾液(時ニ「ブランデー」等ノ「アルコール」飲料又ハ香料ヲ加フルコトアリ)ニ熱ヲ加ヘテ濃縮シ、越幾斯狀トナシタルモノナリ、之ヲ一定期間貯藏シテ醱酵セシムルモノアレドモ多クハ直ニ使用スルヲ常トス。

阿片吸食

阿片ヲ吸食スルニハ吸食器具ヲ使用ス、吸食器具ニハ三ツノ主要具アリ、一ハ煙槍(日本藥器尺八大ナル圓筒)ニシテ其中間側部ニ煙斗(戸ノ開閉ボタン大ノ突起ニシテ中央ニ徑一部位ノ孔アリ)ト稱スル阿片煙膏ヲ裝置スル部アリ、二ハ煙灯ト稱スル豆油ヲ燃料トスル小「ランプ」ナリ、三ハ煙膏ヲ越幾斯狀ヨリ「ランプ」火焰上ニテ粘稠ナル塊片ト爲スニ使用スル煙板兒ト稱スル匙並ニ、生ジタル煙膏塊ヲ煙槍ノ煙斗孔ニ裝置スル煙阡ト稱スル消息子狀ノ金屬棒ナリ、其他之等器具ヲ載スル盆並ニ煙槍ヲ掃除スル附屬器アリ。

阿片ヲ吸食スルニハ癮者ハ横臥シテ、粘稠ナル小指頭大ノ煙膏ヲ煙槍ノ煙斗ノ孔ノ周邊ニ煙阡ヲ以テ、燃燒シテ煙ヲ内部ニ導キ易キ粘着裝置シ、此部分ヲ煙灯ノ火焰ニテ燃燒シ、生ズル煙ヲ吸入スルモノニシテ、煙管ニテ煙草ヲ吸

飲スル如ク二三回吸入シテ終ルモノナリ。

阿片吸食ノ生理ニ就テハ煙草吸煙ト等シク、阿片中ノ鹽基ハ瓦斯狀トナリ呼吸器粘膜ヨリ吸收セラル、ノ想定ニ對シ、實驗的研究上之ニ疑ヲ存スルモノアリ、更ニ阿片燃燒煙中ニ移行スル「モルヒネ」量ノ少キ點ヨリ「モルヒネ」ノ分解產物ニヨリ、吸食ノ主ナル作用ヲ呈ストノ說ヲナスモノアリ、之ニ對シテ中島、久保田氏ノ研究ハ最モ精細ニシテ、此問題ニ解決ヲ與ヘタルモノト云フベシ、即チ氏等ハ阿片吸食ノ實狀ニ一致シタル裝置ハ水銀柱二七—三〇^{mm}ノ陰壓ニ於テ、一六〇乃至二〇〇度ノ熱ヲ加フルニアルコトヲ實驗シ、斯クノ如キ酸素ニ乏シキ高熱ニアラザル條件ニ於テ、一〇瓦ノ阿片煙膏ヲ熱スレバ含有スル「モルヒネ」一三五ノ中、〇・二一四、「ナルコチン」、「コデイン」〇・三七中、〇・〇五一ハ昇華シテ煙ノ中ニ移行シ、煙膏中總鹽基ノ約七分ノ一ハ煙ノ中ニ移行シ、其他ハ燃燒分解セラル、コトヲ證明シ、從來阿片吸飲煙中「モルヒネ」其他ノ鹽基ノ證明少量ナルハ試驗方法ニ於テ、空氣充分ニシテ高熱ナル點ヲ指摘シ、阿片吸食ニ際シ起ル主ナル作用ヲ阿片鹽基、主トシテ「モルヒネ」ノ作用ニ歸シタリ、此業績ハ阿片癮者ハ「モルヒネ」注射ヲ代用シ満足スル事實ニ一致スルモノト云フベシ。

阿片並ニ麻藥ノ中毒ニ陷ルノ動機ハ由來スル事由ニアリ、一ハ疾病治療ノ目的ニテ總テノ疾患ニ對シ阿片「モルヒネ」ヲ使用スルノ慣習深ク一二四〇人ニ就キ調査シタルニ一二二〇人ハ然ルヲ見タリ、二ハ實際上ノ習慣トシテ阿片ハ茶、煙草ノ如ク最初ハ好マザルモ遂ニ中毒ニ陷ルモノニシテ、支那家庭ヲ一瞥スレバ阿片使用ハ主客共ニ禮儀ノ一トナスガ如キ風アリ、三ハ阿片麻藥ヲ房中ニ試ミ精神ノ快感ヲ得ルト共ニ交接時間ヲ延長スルノ風アリ、爲メニ遊里ニ於テハ必ズ阿片ヲ提供スルモノ、如シ。

而シテ之等阿片麻藥使用ノ動機誘因ハ支那民族ノ個性ヲ看過シ能ハザルベシ、由來支那民族ノ娛樂ハ一般ニ濃厚峻烈ニシテ刺激性ニ趣キ易ク、之ヲ五感ノ感覺ヨリ考察スレバ視覺ニ於テ、不潔ヲ意トセザル程求ムル所少キガ如クナルモ、味覺、嗅覺、觸覺ニ於テ極メテ趨向性ナル點ハ、淫蕩夢幻性ナル阿片麻藥ニ導ク大ナル國民的素質ヲ有スルモ

ノト云フベシ。

阿片癮者(中毒者)

斯クシテ阿片ヲ吸食スルヤ最初ハ嘔氣ヲ催シ不快ナルモ、漸次回ヲ重ヌルニ從テ陶然トシテ愉快ナル催眠狀態ヲ覺エ、恍惚トシテ苦悶ヲ忘レ夢幻ノ仙境ヲ浮遊スルノ感ヲ起サシムルニ至リ、其快感ヲ忘ル、能ハズ反復シテ使用スルニヨリ遂ニ中毒ニ陥リ、阿片麻藥ノ供給ヲ絶テバ禁斷症狀ヲ起シ、激烈ナル精神上ノ阿片欲求ニ次ギ顔容ヲ變ジ全身ノ倦怠、四肢、關節ノ疼痛ヲ起シ、甚シキ場合ハ苦悶シ脱力シテ流涎スル等痴呆狀ニ陷ルモノナリ。

而シテ癮者ノ阿片ヲ欲スル念ニ至リテハ、何物ヲモ犠牲トシ耽溺スルヲ以テ漸次中毒量ヲ増加シ、一日ノ吸食量ニ〇[㌔]—三〇[㌔]、其金高五圓七圓ニ達スルモノ少ナカラズ、財乏シクシテ阿片ヲ求ムル能ハザル者ハ、比較的廉價ナル「モルヒネ」ヲ皮下注射シテ禁斷症狀ヲ避ケ満足スルニ至ルモノナリ。

關東州内ニ於ケル阿片癮者數ハ、以前出願許可ヲ受ケタル者二三〇〇名乃至五〇〇名ナリト雖モ、其他ニ多數ノ密吸食者ノ存在セルハ事實ナリ、癮者數ノ稍々精細ナル調査ヲ開始シタルハ、大正十二年(一九二三年)ニシテ其後繼續的調査ノ結果ハ次表ノ如シ。

第一表 關東州内ニ於ケル阿片癮者數

年	次	數
大正十二年	(一九二三年)	二七、四
同十三年	(一九二四年)	二六、五
同十四年	(一九二五年)	二六、五
大正十五年	(一九二六年)	二六、七
昭和二年	(一九二七年)	三〇、六

以上ノ如ク常ニ三萬ニ近キ阿片癮者存在シ、關東州内ノ支那人人口六十七萬ナルヲ以テ、支那人人口百ニ對シ四四七ノ中毒者アルヲ認メ得ベシ、而シテ一人平均一日約八分ヨリ一匁ノ阿片ヲ吸食スルヲ以テ、一ケ年全中毒者ハ九七四〇貫餘ノ阿片ヲ消費シ其金額約三百萬圓ニ上ル狀態ニアリ。
之等ノ癮者中ノ一萬六千餘人ニ就キ住所年齡ヲ調査シタルニ第二表ノ如クニシテ五一二六名(三〇・六六%)ハ不定住者ナリ。

第二表 阿片癮者ノ年齡及住所ノ有無表

[illegible]

第三表 阿片癮者ノ職業別

農	業	二、六五	醫師藥種業	三七	船員	二、四二	漁業	六、七
工	業	二、八三	料理店其他	一、三〇	苦力(勞働者)	三、〇三	無職	三、八
金	融	二、四	馬車及人力車業	一九	湯屋理髮業	六	其他	五、五
商	業	二、六八	仕立洗衣業	二、三	教員僧侶	二、八		
合	計							二、七五

以上述べブルガ如ク常時調査シ得ル數ハ、三萬ニ近キ數ヲ示スト雖モ之ヲ癮者ノ全數ト斷定スルコトヲ得ズ、更ニ多クノ調査不能ノ中毒者ノ存在ヲ思ハザルベカラズ、如何トナレバ關東州ハ山東省並ニ南支ヨリ北滿ニ通ズル要衝ニ當リ、支那苦力ノ移動甚シク、最近二ケ年間ノ大連港ニ於ケル移動數ハ第四表ノ如クニシテ、一ケ年間三十八萬餘ヨリ七十八萬餘人ニ達シ、關東州ノ全支那人人口六十七萬ヲ超過スルコト實ニ十一萬ニ及ブ移動狀態ニアレバナリ。

第四表 大連港ニ於ケル苦力ノ移動狀態

年次別	入 港		出 港		合計
	男	女	男	女	
大正十五年	二〇九、四三三	三、一七七	一三三、〇〇一	八、〇三三	三八、六三三
昭和元年	一〇六、八五五	一〇、六六一	一八、〇七二	一〇、〇三五	一〇一、六七七
昭和二年	一〇六、八五五	一〇、六六一	一八、〇七二	一〇、〇三五	一〇一、六七七

之等ノ苦力ハ一定ノ住所ナキモノ多ク、身ニ纏ヘル儘簡單ナル食器、寢具ヲ携帯シ家族ヲ同伴シテ、野外、路上ニ眠リ、粟ノ「パン」ト水ニヨリ生活シ浴ヲトルコトナク、勞働ニ

一日ヲ費シ轉々トシテ原始的生活ヲスルモ、阿片「モルヒネ」ハ彼等最上ノ娛樂トシテ可ナリ多數ノ中毒者ヲ存ス。

「モルヒネ」ノ中毒者

更ニ「モルヒネ」ノ中毒者ニ至リテハ、其數ニ於テ阿片中毒者ニ比較シ少數ナル可キモ、其甚シク悲慘ナル容姿ヲナスハ、該中毒者ノ多クハ既ニ阿片ニ於テ中毒ノ度ヲ増シ、自己ノ財物ヲ盡シテ吸食シ爲メニ麻力強クシテ、比較的廉價ナル「モルヒネ」ニ其慰安ヲ得ントスル者ナレバナリ。

而シテ彼等ノ「モルヒネ」ノ注射タルヤ、注射液ニ蒸餾水ヲ使用スルニアラズ、器具局處ヲ消毒スルニアラズ、加フルニ不正密賣者ガ増量ノ目的ニテ混入スル不溶解性ノ混入物アル安價ナル「モルヒネ」ヲ井水ニテ溶解注射スル爲メニ、局處ハ紫黑色ノ隆起トナリ、癰疽ヲ形成シ四肢、胸部、腹部、背部ヲ通ジテ皮膚ノ健康面ヲ有セザル迄ニ甚シク、所々ニ化膿々瘍ヲ形成シ一見癩患者ノ如キ狀態ヲナスモノアリ。

之等中毒者ハ主ニ苦力勞働者ニシテ大連ニ於テ調査シ得タル數ハ、千五百名ナルガ「モルヒネ」一日ノ使用量ハ少キ

ハ、〇・〇五ヨリ一・五ニ及ブモノアリ平均一日〇・二ヲ使用ス、サレバ一ケ年ヲ通ジテ二百五十磅ヲ使用スル計算トナル、然レドモ此中毒者數ハ調査シ得タル數ナルヲ以テ、此以外ニ調査不能ノ數ハ轉々トシテ定住ナク、其日送りノ者阿片癮者ノ密吸食者ニ比シ、更ニ甚シキニヨリ從テ其率ノ高キ事言フ俟タザル處ニシテ、彼等ノ多クハ自己ノ姓名スラ書スルヲ得ザルハ勿論、自己ノ出生地、年齢スラ記憶セズ、檻樓其儘ノ様ヲナシ飢ントシテ尙麻藥ヲ求メテ止マズ、得ザレバ遂ニ罪ヲ犯スニ至リテハ、社會ノ秩序制度ニ超越シタルモノニシテ、常軌ヲ以テ忖度スベカラザルモノナリ。

二、阿片麻藥取締方法ト其批判

關東州ノ阿片麻藥取締制度ヲ考フルニ、露國ノ租借地時代既ニ阿片販賣ニ稅ヲ課セシガ、明治三十九年（一九〇六年）特定人ヲシテ輸入販賣セシメ、明治四十二年（一九〇九年）上海ノ阿片會議後阿片ニ對スル政策ヲ變更シ、漸禁主義ヲ採リテ輸入ヲ制限スルニ至リ、大正四年（一九一五年）ニハ特定人ノ輸入販賣ノ特許ヲ慈善團體タル宏濟善堂ニ移シ、其監督ヲ嚴ニ許可セラレタル癮者以外ノ一般阿片吸食ヲ禁ジ、更ニ大正十三年（一九二四年）勅令ヲ以テ關東州阿片令ヲ公布シ、阿片並ニ吸食器具ノ輸出入ニ賣買、所有、所持、阿片癮者ノ許可ヲ關東長官ノ權限ニ移シ、罌粟ノ栽培、煙館ノ開設ヲ禁ジ、違反者ニハ刑法ノ阿片罪ニ相當スル嚴刑ヲ課スルコト、ナレリ、近時更ニ勅令ヲ改正シテ阿片ノ輸入賣下ヲ官ノ專賣トナシ煙灰ノ賣買ヲ禁止スルノ案進行中ナリ。

「モルヒネ」、「コカエン」等ノ麻藥ニ對シテハ、明治四十四年（一九一一年）以來醫療用以外ノ輸入ヲ禁ジ、密輸入ニ對シテハ沒收處分トナシ來リシガ、昨年十月（一九二七年）「モルヒネ」、「コカエン」並ニ其誘導體ノ輸入ニ關スル細密ナル取締規則ヲ公布シ、麻藥類一切ノ取締ニ任ズベク法制ノ形式備ハレリ。

凡ソ社會ノ生活現象ハ需要ト供給アルニ依リ取引ヲ生ズ、之等法制ノ主要點ハ需要ト供給問題ニ觸ル、コト少ナク、其結果タル取引制限ニ汲々タリ、然モ實際問題トシテ支那民族ノ個性ヲ沒却シタル、國際關係ノ理想論ニ追尾セル點

多シ、サレバ制度變遷スルモ效果ノ更ニ見ル可キモノナク、取締ノ結果タルヤ只單ニ麻藥ノ市價ヲ騰カラシメ、不正ナル密輸入者ヲ利シ、悲慘ナル中毒者ニ高價ナル麻藥ヲ提供シ、每更ニ罪人ヲ作りタル歸結以外ニ見ルベキモノナシ、宜ナリ本能的習慣娛樂ヲ法律規則ヲ以テスル防止ノ失敗ハ、賣淫取締ノ歴史明カニ之ヲ證明ス、麻藥ニ對スル防止實現スレバ幸ナリ。

眞ニ阿片麻藥廢止ノ效果ヲ舉ゲントセバ一方法制上ノ期待ヲ需要ト供給トノ根本ニ置キ、熱帶地方ノ阿片並ニ歐洲各國ノ麻藥生産ヲ制限シ、他方社會施設トシテ麻藥教育ノ運動ヲ起シテ中毒者ノ發生防止ニ努力シ、中毒者ヲ治療シテ麻藥ヲ廢止セシメ、代ルニ他ノ嗜好的娛樂ニ導カザルベカラズ、之レ中毒者治療問題ヲ重要視スル所以ナリ。

三、變質劑使用ノ動機ト療法ノ文獻

小澤篤次氏ハ東京ニ於テ「モルヒネ」中毒患者ノ診療ニ當リ、變質劑ノ使用ヲ企テ沃度、亞砒酸、鹽化カルシウム、ノ合劑ヲ製出シ、動物試驗ニヨリ毒性ノ弱キヲ知り大正五年ヨリ同八年ノ間ニ於テ、十人ノ「モルヒネ」中毒患者ニ使用シ頗ル好成績ヲ舉ゲ得タルヲ以テ、大正十年五月「モルヒネ」中毒患者ノ多數ナル北滿長春ニ至リ、一般醫業ヲ營ミツ、之等中毒患者ニシテ療養ノ資ナク、冬期路傍ニ於テ凍死者ヲ出スガ如キ苦力ノ群ニ、之ヲ試用シ好成績ヲ舉ゲタルヲ以テ大正十年六月大連小崗子ニ轉ジ、獨力ヲ以テ支那人ノ之等中毒者ニ無償施術シ、同様ノ成績ヲ舉ゲ世ノ注目ヲ索ケリ。

之ヲ以テ大正十三年二月現下ノ重要問題タル阿片麻藥中毒者治療ニ、本療法ヲ行政的ニ採用シ得ルヤ否ヤ調査スル必要ヲ感ジ、警察官署ヲ煩シテ小澤氏療法ヲ受ケタル者ニ就キ實狀調査セシニ、第五表ノ如ク十八名ニ對スル八名ハ全治シ、九名ハ無効ニシテ一名ハ一時治癒セシモ、再ビ使用シタルノ報告ヲ得タリ。

之ヲ以テ現時ノ如ク麻藥中毒患者ニ對スル特殊ノ療法ナキ時ニ於テ、本療法ヲ調査研究スルハ價值アルモノト認

メ、更ニ警察官署ヨリ送致セル阿片「モルヒネ」中毒患者ヲ小澤氏ニ依託シ、本療法ノ經過ヲ觀察シタルニ、之亦殆ド同様ノ成績ヲ舉ゲ得タリ。

第五表 小澤療法調査表

氏名	治療前 用藥數	治療開始當時ノ 麻藥ノ使用量	治療期間	治療後麻藥 ノ使用量	一時的ナ リヤ否ヤ	此ノ療法ニヨリ身體ニ起リタル變化
對國情	一〇年	一匁二分	一四日	〇	一時的	食慾増進睡眠不能
高瑞軒	二〇年	一匁八分	一四日	〇	リ	〃
韓殿江	七年	一匁二分	一八日	〇	リ	〃
李紹賊	八年	一匁五分	二五日	〇	リ	〃
高散長	一〇年	八分	一四日	〇	リ	〃
魏長發	一五年	八匁	三〇日	五匁	リ	〃
岡田梅	二年	モルヒネ注射十本	九〇日	一週間ニ一本	リ	肥滿睡眠不能
高瀬コソ	五年	モルヒネ注射五本	一二〇日	一ヶ月一本	リ	殆ド恢復狀態
冷子氏	四年	三匁八分	一三日	〇	リ	食慾増進一般狀態佳良惡影響ナシ
齊彪楊	三年	一匁八分	二一日	〇	再發セズ	〃
陳虎	三年	八分	一一日	〇	リ	〃
齊書	二年	一匁五分	一七日	〇	リ	〃
董氏	四年	三分八分	二一日	〇	リ	〃
任運九	三年	八分	一三日	〇	リ	〃
宮崎ト	二年	二匁八分	一二日	〇	リ	〃
孫玉峰	二年	二匁八分	一一日	〇	リ	〃
王子郷	六年	六分	一二日	〇	リ	〃
逢王璋	二〇年	四分	一四日	四分	再發	變化ナシ (二ヶ月後下痢ヲ起シ阿片ヲ用ヒタリ)

茲ニ於テ麻藥中毒ノ生理、病理並ニ現今ノ療法ヲ考察スルニ、「モルヒネ」中毒ノ藥理ハ、生體ガ漸次「モルヒネ」ヲ

分解スルノ機能ヲ熟練習得スルト共ニ、神經組織ノ抵抗力増大ヲナスニ起因スト説明セラル、ガ、一方「モルヒネ」中毒屍體ノ病理變化ハ主ニ中樞神經系統ニ認メラレ、「ニッスル」氏顆粒ノ變化、神經細胞ノ溷濁腫脹、萎縮變性、空胞形成、染色質ノ消失等ニシテ、甲狀腺生殖腺副腎等ノ内分泌臓器ノ變化ハ、堀内氏ノ人體並ニ動物試驗ニ徴シ證明シタル處ニシテ、療法ニ關シ看過シ得ザル業績ト謂フベシ。

斯クノ如キ藥理的、病理的變化ヲ受ケタル阿片「モルヒネ」中毒者ニ對シテ、行ハレタル療法ヲ考フルニ、多クハ斷禁療法、漸減療法トシテ患者ヲ監禁シ、中毒藥物ヲ禁止シ、又ハ嚴重ナル監視ノ下ニ中毒藥物ヲ漸減スルノ方法ナリ、又中毒麻藥ヲ他種類ノ麻藥「ヘロイン」、「コデイン」等ニ變換シ、習慣性ヲ得ザル間ニ減量スル一種ノ變法モ多ク試ミラレタリ、又阿片含有ノ總「アルカロイド」ヲ抽出シタル麻藥ハ比較的習慣性少ナキト、且ツ不快ナル臭氣アリテ快感少ナキ點ヲ利用シ、禁斷症狀ヲ起サザル程度ニ使用シ、其不快ノ感ヲシテ使用ニ遠ザカルノ法ヲ試ミルモノニ額田氏ノ「ババロイン」アリ、「アドロビン」ヲ使用セラル、コトハ又屢々報告セラル、處ナルガ、其變法トシテ京城ノ周防氏ハ「アトロビン」ヲ含有スル植物成分ヲ抽出シ、之ヲ「アンチモヒン」ト稱シ少量ニテ禁斷症狀ヲ止メ得トセリ、其他禁斷療法ノ對照療法トシテ「ブROOM」劑、抱水「クロラール」等ノ鎮靜劑ハ屢々使用セラル。

先年米國ニテ一時流行セシ所謂「Quinje treatment」ハ、其使用藥劑分析ノ結果主トシテ單ナル下劑療法ニシテ、之ニ加フルニ初メ「アトロビン」ヲ後ニ「ストロキニーネ」ヲ與フルモノニシテ特殊ナル方法ナラズ、紐育「ブラクウエル」島隔離院ノ附屬病院ニ於ケル療法ハ、Hyacinthe、ヲ主成分トスル根治藥ヲ使用シ、身體ノ一時的衰弱ニヨリ身體ノ改造ヲ計リ、經過中衰若「アドロビン」甘汞下劑ヲ稱用スルモ亦其一種ニ過ギザルベシ、「クラウセ」、「グリー」氏ノ書ニ於テモ「コデイン」、「ドルミン」ノ注射ヲ以テ代用シ、胃洗滌、「アルルカリ」劑投藥等ニテ禁斷症狀ヲ緩和スルニ過ギズトシ、O. Wuth、ハ禁斷療法ノ對照療法トシテ「クロラールヒドレート」、「ルミナール」、「ペロナール」、「アダリシ」、「アンチビン」、「クナセチン」、「ビラミドン」ヲ用ヒ、Hossein、ハ「クノバルビトール」又ハ「ルミナールナトリ

ウム」ヲ稱用シタル何レモ對照的ナリ、Haskell, Rucker, Snyder, 「カヘイン」ヲ使用シタルモノアレドモ Richmond, ニヨレバ、普通量又ハ其以上ニテハ「モルヒネ」中毒ニ對シ害アリテ益ナシト稱セリ。

O. Moor: ノ「過マンガン酸カリ」ハ「モルヒネ」酸化作用強ク良ク解毒スト稱スルハ、急性中毒ニノミ應用シ得ルノミ。
Scott. ハ「ラツテ」ニテ試験シ副腎ト「モルヒネ」耐量間ニ關係アリ、副腎ヲ去ルトキハ「モルヒネ」耐量ヲ減ズトシ、
O. Wuth. ハ「モルヒネ」中毒ト甲状腺機能減退ト症狀相似シ、「モルヒネ」ヲ用フル間ハ副交感神經昇マリ、之ヲ廢スルトキハ交感神經緊張ストシ、内分泌ト關係アル點ヨリ「グレー」、「グロースマン」氏ハ「ヒヨリン」ヲ臨床上ニ應用シ著効アリトシ、中野氏ハ女子ノ「モルヒネ」中毒者ニ「スベルマチン」ヲ使用シ卓効アルモ男子ニ無効ナルヲ報告シ、柴田氏ハ婦人中毒者ニ「スベルマチン」、「オーホルミン」、「ヴァイターミン」ヲ併用シテ全治セシメタル少數ヲ報告シ、伊藤氏又「スベルマチン」ノ實驗ヲ報告ス、而シテ「モルヒネ」ヲ注射シタル動物血清ヲ以テスル療法ハ全然失敗ニ終レリ。

斯クノ如ク漸減療法、對稱療法、内分泌療法ノ範圍ヲ出デザル現今ニ於テ阿片又ハ「モルヒネ」ノ連用ニヨリ藥理的ニ習慣性機能ヲ生ジ、病理的ニ變化ヲ生ジタル身體内組織細胞ニ對シ、新陳代謝ヲ速ニスベキ刺激機轉ヲ加ヘ、短期間ニ之等機能的ニ又組織的ニ變化ヲ受ケタル組織細胞ノ交換ヲ促シ、或ル時期ニ於テ中毒藥物ニ關係ナキ生理的細胞組織ニ、轉換セシメントスル企圖ハ未ダ文獻ヲ見ズ、然モ合理的ナルヲ信ズルモノナリ、此目的ニ適スル藥物ヲ考フル時ニ細胞ノ新陳代謝機轉ニ影響ヲ加ヘ、病的變化ヲ受ケタル細胞ノ吸收ヲ促スモノハ、何人ト雖モ變質劑中沃度劑ヲ考フルヲ常トスベシ、又新生細胞ノ形成機轉ヲ促ス藥劑トシテハ、之ヲ亞砒酸ニ求ムルヲ常トスベシ、亞砒酸ハ腺病質、惡液質ノ體質變化ノ藥劑トシテ、古クヨリ稱用セラル、ハ周知ノ事實ニシテ、或ル地方ニテハ榮養保存ノ目的ヲ以テ之ヲ常用トスル處アリ、其少量ヲ持續シテ内服スレバ同化機轉亢進シ、脂肪組織肥厚シ皮膚ノ榮養佳良トナルコトハ成書ノ所載ニシテ、初生動物ノ食餌ニ少量ノ亞砒酸ヲ加ヘテ飼養スレバ、對照動物ニ比シ皮膚ノ榮養、脂肪組

織、骨ノ發育甚ダ良好ニシテ、受胎セル母獸ニ亞砒酸ヲ與フルトキハ、胎兒ノ發育殊ニ大ナル爲メ分娩ニ困難ヲ感ズルノ事實ニ至リテハ、今求メントスル希望目的ニ甚シク合致スルモノト云フベシ。

更ニ「カルシウム」ハ一般ノ榮養促進ノ目的ヲ以テ、各種ノ疾患ニ使用セラル、流行ノ藥物ナリ、之レ小澤氏變質劑ヲ試ミントシタル動機ニシテ、未ダ實驗的研究ヲ缺キ學理ノ説明不充分ナリト雖モ、實地上有効ナル例症ヲ有シ然モ藥理ヲ以テ説明全ク不可能ナルモノニ非ズ、發見ハ學者ノ專賣ニアラザルヲ以テ、大連ニ於ケル麻藥中毒治療法トシテ採用スルニ決シ、大正十三年九月以來繼續シテ宏濟善堂救療所ニ收容セル千六百〇一名ノ施療患者ニ試ミタルモノナリ。

四、小澤氏變質劑ノ性狀性質

小澤氏變質劑ハ亞砒酸加里 $\text{O} \cdot \text{O}$ ニ沃度 $\text{O} \cdot \text{五}$ 鹽化カルシウム $\text{一} \cdot \text{O}$ ノ比ヲ以テ合成シ、合成ノ過程ニ於テ沃度水素酸ヲ除去シ、之ヲ $\text{一} \cdot \text{O} \cdot \text{O} \cdot \text{O} \cdot \text{C} \cdot \text{C}$ ノ「リンゲル」氏液ニ含有セシメタルモノナリ、合成上ノ本劑ハ「クロール、カルシウム」 $\text{C} \cdot \text{H} \cdot \text{O} \cdot \text{S}$ 沃度「カルシウム」 $\text{C} \cdot \text{H} \cdot \text{O} \cdot \text{S}$ 、砒酸加里 $\text{K} \cdot \text{H} \cdot \text{A} \cdot \text{S} \cdot \text{O}$ ノ狀態ニテ含有セラル、モノニシテ「クロール、カルシウム」ト沃度「カルシウム」トノ含有比ハ、合成ノ時ニヨリ幾分ノ變動ヲ免レザルガ如シ。

無色透明無臭ノ液體ニシテ少シク鹹味ヲ有ス、比重 $\text{一} \cdot \text{O} \cdot \text{O} \cdot \text{五}$ 乃至 $\text{一} \cdot \text{O} \cdot \text{O} \cdot \text{八}$ 、熱光線ニヨリ變化セズ、久シク貯藏スレバ壁ニ「カルシウム」ヲ少シク拆出ス、硝酸ニヨリ沃度ヲ拆出シ黃色ヲ呈シ、稀酸「アムモニヤ」ニヨリ白色ノ石灰ヲ沈澱ス、本劑 $\text{一} \cdot \text{O} \cdot \text{O} \cdot \text{C} \cdot \text{C}$ ヲ蒸發シ殘渣ヲ硫酸ニ溶解シ、水素瓦斯裝置ニ投入シ、生ズル砒化水素ヲ硝子管ニ導キ熱スレバ砒素鏡ヲ生ジ、紫黑色ノ輪ヲ見ル、次亞クロール酸ソーダ、ヲ以テ處理スルコトニヨリ溶解ス。

本劑ヲ「マウス」ノ靜脈、腹腔、皮下ニ $\text{一} \cdot \text{O} \cdot \text{O} \cdot \text{一}$ ヨリ $\text{一} \cdot \text{O} \cdot \text{O} \cdot \text{九}$ 迄注入シタルモ何等ノ異狀ヲ認メズ、依テ $\text{一} \cdot \text{O} \cdot \text{一}$ ヨリ $\text{一} \cdot \text{O} \cdot \text{七}$ 迄ヲ注入シタル靜脈注射ニ於テハ $\text{一} \cdot \text{O} \cdot \text{五}$ 並ニ $\text{一} \cdot \text{O} \cdot \text{七}$ ニテ死シ、腹腔注射ニテハ $\text{一} \cdot \text{O} \cdot \text{四}$ ニテ死シタルモノアリ、皮下注射ニ

テハ〇・八ニテ死セリ、家兎ニ靜脈注射セルニ二五 C.C.ヲ注射スルモ一時異狀ヲ呈スルノミニテ、翌日ハ恢復シ何等ノ症狀ナシ、其成績ハ第六表乃至第八表ニ見ル如ク、毒力極メテ弱キモノナルコトヲ推定シ得ベシ。

第六表 マウス靜脈注射

試驗			對照		
小澤氏液含量	マウス體重	生死ノ別	マウス體重	食鹽水	生死ノ別
〇・一	一一・五	生			
〇・二	一〇・五	生			
〇・三	一〇・〇	生			
〇・四	一一・〇	生			
〇・五	一一・〇	死	生	九・〇	〇・五
〇・六	一二・〇	生	生	一〇・〇	〇・六
〇・七	一四・〇	死	生	一〇・〇	〇・七
〇・八			生	一〇・五	〇・八

第七表 マウス腹腔皮下注射

腹腔			皮下		
小澤氏液量	マウス體重	生死ノ別	マウス體重	生死ノ別	生死ノ別
〇・一	一二・五	生	一四・八	生	
〇・二	一一・三	生	一六・二	生	
〇・三	一一・五	生	一七・二	生	
〇・四	一〇・四	死	一九・〇	生	
〇・五	一五・〇	生	一六・一	生	
〇・七	一六・〇	生	一六・〇	生	
〇・八			一六・二	死	

第八表 家兎靜脈注射

家兎體重	小澤氏液注射量	生死ノ別
一一九・〇	一〇・〇	生
一二五・〇	一五・〇	生
一五〇・〇	一〇・〇	生
一六〇・〇	一五・〇	生

五、靜脈注射セル變質劑ノ排泄

靜脈内ニ注射シタル本劑ノ排泄ハ如何ナル狀態ニアルヤハ、本劑ノ使用量、體力ノ考慮、經過ノ觀察ニ重大ナル關係アルヲ以テ、一應實驗スル必要アリ、本劑ノ含有成分中沃度並ニ砒素ハ此點ニ關シ標準タルベキヲ以テ、之ヲ目標トシ尿、唾液、糞便ニ就キ其排泄ヲ驗シタリ。

尿ニ排泄スル沃度、砒素

尿ニ排泄スル沃度、砒素ハ排泄毎ニ全尿ヲ採取スレバ、時間的ニ濃度ヲ知ルコトヲ得ルヲ以テ、此方法ニヨリ一週間ニ亘リ、一日一回注射(午後六時)ト一日二回注射(午前十時及午後六時)トノ二群ニ分チ注射シ、後二日間注射ヲナサズ觀察調査シタリ、以下沃度ト

砒素トニ區別シテ記述スベシ。

沃度ノ検査方法ハ排泄毎ニ尿一〇・〇ccヲ取り、「クロルホルム」少量ヲ加ヘ更ニ澱粉末ヲ混ジテ振盪シ、之ニ發煙硝酸ヲ滴下シ振盪シツ、藍色ヲ呈シ、其色ノ濃度極度ニ達スルニ至リテ止ム、此藍色ヲ呈シタルモノハ陽性ニシテ、陽性ノ程度判別ハ藍色ノ度濃厚ニシテ試験管ヲ透過シ得ザルモノヲ(卅)トシ、透過シ得ルモノヲ(廿)トシ、薄紫色ナルモノヲ(十)トシ、「クロルホルム」ニ少量ノ沃度移行ノ色ヲ認め、其上層ニ僅ノ紫色輪ヲ呈スルモノヲ(土)トナシ、藍色ヲ呈セズ沈澱スル「クロルホルム」ニ沃度移行(移行スレバ紫色ヲ呈ス)セザルモノハ陰性トス。

此方法ヲ以テ實驗シタル二群ノ成績ハ何レモ大差ナキヲ以テ、各群二例ノ成績ハ第九表第十表ノ如クニシテ、一日一回注射、二回注射共ニ注射後二回乃至三回ノ排泄ニヨリ大部分ヲ排泄シ、注射後十六時間乃至二十四時間後ニハ極メテ少量ヲ排泄ス、然レドモ此少量ノ沃度ハ比較的長時間排泄ヲ繼續シ、時間的ニハ三十時間乃至五十時間證明スルコトアリ。

尿中沃度排泄開始ノ關係ヲ見ントシ注射前排尿セシメ、沃度ナキヲ確メ注射後二十分ニシテ排尿セシメシニ、其尿中多量ニ沃度ヲ證明シタリ依テ本劑排泄ハ速ニ起ルモノナルコトヲ知レリ。

砒素ノ排泄検査法ハ大連滿鐵衛生研究所ノ中橋衛生科長ノ指導ト、館所員ノ援助ニヨリ比較的操作簡單ナル、「フレゼニウス」氏法ニヨリ有機質ヲ破壊シ砒素鏡ヲ以テ證明スルノ法ヲ取レリ、即チ排尿毎回全尿ヲ取り重湯煎上ニテ蒸發シ、殘渣ガ越幾斯狀トナリ濃縮ノ極點ニ達シタルトキ、冷却セザル内速ニ硝酸ヲ二三滴宛、滴下シ攪拌スルトキハ酸化シテ瓦斯ヲ發シ殘渣ハ粉末狀トナル、之ヲ更ニ乾燥器中ニテ乾燥ス、此際硝酸過量ナレバ再ビ越幾斯狀トナリ粉末狀トナラザルニ至ル、此時ハ更ニ重湯煎上ニテ硝酸ヲ飛散セシメ後乾燥器中ニ容ル此際ハ粉末狀トナラズ塊狀トナル、此乾燥シタル殘渣全部ヲ取りテ秤量シ、之ト等量ノ「過マンガン酸カリウム」(豫メ粉末トナスヲ要ス)ヲ混ジ乳鉢ニテ能ク混和ス、此際化合ヲ起シ瓦斯ヲ發シ、時ニ火ヲ發スルコトアリ、然レドモ成績ニ何等ノ變化ヲ及ボサズ、混

和シタルモノヲ蒸發皿ニ採リ一〇%ノ硫酸ヲ殘渣ノ二倍量ヲ加ヘ、温メツ、化合ノ終ルヲ待チ更ニ濃硫酸ヲ稀硫酸ト

表九第 一回注射中尿度檢出時間表
(午後六時注射)

一日	二日	三日	四日	五日	六日	七日	八日	九日	一日	二日	三日	四日	五日	六日	七日	八日	九日
午後六時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃七時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃八時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃九時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃十時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃十一時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃十二時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
午前一時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃二時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃三時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃四時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃五時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃六時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃七時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃八時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃九時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃十時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃十一時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃正午	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
午後一時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃二時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃三時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃四時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
〃五時	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅

等量ニ加フル時ハ、著シク瓦斯ヲ發生シ有機質ハ全ク破壊セラル、此化合全ク終リタル後過酸過水素液ヲ適宜加ヘ過量ノ「過マンガン酸カリウム」ヲ脱色シ淡小豆色ノ程度ニ止メ加温スレバ全ク脱色シ透明ノ液トナル、之ヲ二十四時間

放置冷却スレバ液中ニ鹽類ノ結晶ヲ拆出ス、此結晶ヲ去リ透明液ヲ「フレゼニウス」氏水素發生裝置（亞鉛粒ト一五％

表〇一第 二回注射尿中沃度檢出時間表

（午前十時、午後六時注射）

九日	八日	七日	六日	五日	四日	三日	二日	一日	九日	八日	七日	六日	五日	四日	三日	二日	一日	
			卅							卅		卅			十			午前十時
					十	十					卅							十一時
	十		卅			卅					卅	卅	卅					正 午
		卅					卅		一		卅							午後一時
一				卅			卅	卅							土			二時
			卅		卅					卅		卅	土	十	卅	卅		三時
一							卅		一		卅							四時
	一	卅				卅												五時
		卅		卅	十			卅			卅	卅	卅		卅			六時
											十							七時
			卅							土		卅	卅					八時
					卅								卅	卅	卅			九時
	一	卅	十						一		十							十時
一					卅					卅	卅	土	土					十一時
			十	十														十二時
		十	十		卅						卅	土						午後一時
	一									土						十		二時
一									一		卅							三時
	十																	四時
				土	十	卅	卅	卅			十	卅			十			五時
	一		十			卅								十	十			六時
			土							十	土	十						七時
		土					卅	十	一		十	土						八時
																土		九時

硫酸ナルモ實際ハ少シク硫酸ノ多キヲ可トスニ入レ砒化水素トナシ、硝子管ニ導キ其通過中ヲ熱シ、砒素鏡ヲ生ゼ

— 八四四 —

シム、砒素ノ發現ハ早キハ二十分間位ヨリ發現スルモノアルモ、時ニ一時間二十分位ヨリ發現スルモノアルヲ以テ、

表間時出檢素砒中尿射注回二 表一一第
(射注時六後午・時十前午)

[illegible]

水素發生裝置ニハ二時間裝置スル必要アリ。

以上ノ検査法ヲ以テ生ズル判定ハ定量のニハ適確ナラザルモ、大要其程度ヲ知ルコトヲ得ルヲ以テ、小澤氏變質劑
 二〇〇_{C.C}ヲ以テ作リタル砒素鏡ニ相當スル暗黒色ノ砒素輪ヲ生ズルモノヲ(卅トシ、極メテ少量ニ淡褐色ヲ生ズルモノ
 ヲトシ、其中間ニ在ルモノヲ其程度ニヨリ卅卅卅トシタリ。

以上ノ方法ニヨリ一日二回注射(午前十時及午後六時)ノ者二例、一週間注射シ、其後二日觀察シタル成績並ニ、一
 日一回注射三例、二日間觀察シタル成績ハ第一一表第二二表ノ如ク兩者共ニ大體ニ於テ、沃度ノ排泄ト等シク、注射
 後二三回ノ排尿ニヨリ大部分ヲ排泄シ、注射後十六時間乃至二十四時間後ハ極メテ少量ヲ排泄スルノミナリ。

第二二表 一回注射尿中砒素檢出時間表 (午後六時注射)

		明 稀 王			
		二日	一日		
午後	六時				
	七時				
	八時	卅			
	九時		卅		
	十時				
	十一時				
	十二時	十	十		
	午前一時				
	二時				
	三時				
	四時	十			
	五時				
午前	六時		十		
	七時	卅			
	八時		十		
	九時				
	十時				
	十一時				
	正 午				
	午後七時				
	二時	十			
	三時				
	四時				
	五時	十			

唾液ニ排泄スル沃度、砒素

唾液ノ排泄スル沃度砒素ハ極メテ少量ナルガ排泄シ來ルコトハ明カナリ、沃度ハ極メテ速ニ排泄シ來リ、注射中舌
 ニ熱感アルトキハ既ニ沃度ヲ分泌シ、唾液ヲ甘汞粉末上ニ吐カシムレバ甘汞ハ沃度ヲ吸收シテ黃色ヲ呈ス、唾液約五
 C.Cヲ試験管ニ採リ倍量ノ水ヲ加ヘテ振盪シ、澱粉末ヲ加ヘ更ニ發煙硝酸ヲ滴下シ混和スレバ薄キ紫色ヲ呈ス、即チ尿

此反應ヲ時間的ニ觀察スレバ第一三表ノ如ク大體十八時間證明スルコトヲ得、尿中ノ排泄ニ等シキモ一回ノ排泄量少量ナリ、小澤氏ハ甘汞ノ反應ニテ注射後七十二時間ニテ尙證明シ得ルモノアリシト云フ。

唾液中ノ砒素檢出法ハ文獻ニ發見セザルモ、尿中

患者名	王鴻	石人	王每
(午後六時半 注射後卅分)	+	+	+
翌午前七時	+	+	+
午前十時	痕跡	〃	〃
正午	痕跡	〃	一
三時	一	痕跡	一
四時	一	一	一

ニハ之ヲ證明スルコト能ハザリシヲ以テ、人工的ニ舌上ニ酒石酸ノ結晶(麻實大ナルモノ)ヲ含マシメ、注射後一時間

砒素檢出法ト同様ノ方法ヲ以テ證明スルコトヲ得タ
リ、尿ニ比シ「過マンガン酸カリ」ノ混和量並ニ硫酸
ノ量ハ倍量ヲ要シタルト、水素瓦斯裝置時間ハ尿ニ
比シ甚シク長時間ヲ要シタリ、而シテ自然排泄唾液

唾液中砒素檢出操作表 第一四表

備考、揚、張、張汝ノ砒素含有酸液中ヨリ析出結晶各三、二七〇・九五ナ除却シタリ。	對稱	注射原液	人工分泌		自然分泌				唾液量	乾燥殘渣	過マンガン酸カリ	稀硫酸	濃硫酸	過酸化砒素液	砒素含有酸液	成結
			張汝熙	張超九	揚紹庚	房文泰	〃	關廷魁								
		八〇・〇	一六三、〇	三七、〇	二五三、〇	三六、〇	七〇、〇	五、〇	八、〇	〇、三	〇、六	〇、五	〇、七	〇、七	一〇、〇	一
		三・五、五	二、六	二、一	二、五	〇、三	〇、二	〇、四	〇、〇	〇、三	〇、六	〇、五	〇、七	〇、七	一〇、〇	一
		一、〇	五、二	四、二	五、〇	〇、六	〇、五	〇、八	〇、〇	〇、六	〇、五	〇、五	〇、七	〇、七	一〇、〇	一
		一、〇	八、〇	九、〇	六、〇	〇、五	〇、五	〇、五	〇、〇	〇、五	〇、五	〇、五	〇、七	〇、七	一〇、〇	一
		一、〇	八、〇	九、〇	六、〇	〇、七	〇、七	一、〇	〇、〇	〇、七	〇、七	〇、七	〇、七	〇、七	一〇、〇	一
		二九、〇	二四、〇	二八、〇	二六、〇	一五、〇	一七、五	一七、〇	一〇、〇	〇、〇	〇、〇	〇、〇	〇、〇	〇、〇	一〇、〇	一

備考、揚、張、張汝ノ砒素含有酸液中ヨリ析出結晶各三、二七、〇九、五ナ除却シタリ。

分泌シタル唾液ニ翌日注射一時間後ヨリ同様ノ方法ニテ、一時間分泌シタル唾液ヲ加ヘ合計二時間内分泌シタル、二〇〇・〇^{c.c.}以上ノ唾液中ニ少量ノ砒素ヲ證明シ得タリ、即チ唾液中ニ排泄スル砒素ハ、自然分泌唾液ニ排泄シ得ザルヲ以テ、時間的ニ證明スルコト能ハザルモ少量ヲ排泄シ來ルハ明カナリ、其檢出操作成績表第一四表ノ如シ。

糞便中ニ排泄スル砒素

糞便中ノ砒素檢出法ハ文獻ニ之ヲ發見セザルモ、尿ノ其レト等シク「フレゼニウス」氏法ヲ以テ試ミシニ、糞便乾燥ノ操作ト有機質破壊後、濾過操作ヲ増シタルノミニシテ砒素ヲ證明シ得タリ、即チ糞便ノ一回排泄量全部ヲ磁製皿ニ採リ、之ニ硝酸ヲ五——一〇^{c.c.}宛時々加ヘ攪拌シツ、重湯煎上ニテ乾燥スレバ、黃色ノ亞硝酸瓦斯ヲ發散シツ、漸次乾燥シ其量ヲ縮少シ、十時間内外ニテ全ク乾燥シ麻實大ノ塊片ノ群トナル、之ヲ更ニ「ザントバード」上ニテ燃燒セシメザル様注意シツ、短時間加熱シ、一部黑色化スレバ直ニ加熱ヲ中止シ、殘渣ヲ秤量シ其倍量ノ「過マンガン酸カリ」末ヲ加ヘ混和シ、稀硫酸、濃硫酸、過酸化水素ノ操作ハ尿ノ場合ニ等シク、其結果白色泥狀ノ沈渣ヲ多量ニ含有スル黃色ノ液トナル、此上層ノ液ヲ折濾紙ヲ以テ濾過シ後ヨリ白色泥狀ノ沈渣全部ヲ濾紙上ニ入ルレバ、硫酸石灰ヲ含ムヲ以テ其固結收縮ニヨリ、液體ハ完全ニ濾出セラレ黃金色ノ透明液ヲ得、之ヲ二十四時間放置冷却シ、析出スル結晶ヲ除却シタル清澄液ヲ水素瓦斯裝置ニ混入スルコト尿ノ場合ニ等シ、只尿ニ比シ水素瓦斯裝置時間長ク、一時間半ニシテ漸ク發現ス。

此方法ヲ以テ三例ヲ實驗シ砒素ヲ證明シ得タルガ、糞便中ノ砒素ハ時間的ニ證明スルコト能ハザルモ、便通間ノ時間内ノ排泄量ヲ大體知ルコトヲ得タリ、其量ハ尿中ニ排泄スル如ク多キモノニ非ズ、甚シク少ナキヲ知レリ、其檢出操作成績ハ第一五表ノ如シ。

靜脈内ニ注射セル小澤氏變質劑ハ主トシテ尿ヨリ排泄セラレ、二三回ノ排尿ニヨリ其大部分ハ排泄シ、一日二回注射スルモ翌日ノ注射時間迄ニハ、痕跡ヲ認ムル程度ナルヲ以テ、蓄積ノ傾向少キモノト認ム、唾液、糞便中ニモ排泄

シ來ルモ其量極メテ少シ。

第一五表 糞便中砒素檢出操作表

對稱 I	對稱 II	對稱 III	王建亭	莫廷魁	圖
原液	〃	〃			
七〇、〇	一〇〇、〇	五〇、〇	一〇〇、〇	一六〇、〇	二二〇、〇
硝酸量	〃	〃	五九、〇	六〇、〇	一〇〇、〇
乾燥殘渣	六、二	一〇、九	八、八	一五、五	三四、〇
過マンガン酸カリ	〃	一七、六	三三、六	三三、〇	六六、〇
稀硫酸	〃	三三、〇	五〇、〇	八〇、〇	一七〇、〇
濃硫酸	〃	三〇、〇	五二、〇	四五、〇	九〇、〇
過酸化水素	〃	四〇、〇	八〇、〇	四五、〇	一三〇、〇
濾過殘渣	〃	四三、一	〃	四七、五	七三、八
結晶押出	〃	一五、〇	〃	二六、四	二二、九
檢出液	〃	五〇、〇	七〇、〇	五七、〇	九八、〇
	廿	卅	十	廿	十

六、變質劑使用ノ臨床觀察

中毒患者收容狀態

阿片「モルヒネ」中毒患者ハ嚴重ナル監視ノ下ニ、麻藥ヲ漸禁スレバ何等ノ療法ヲ加ヘザルモ治癒スルモノナルヲ以テ、本療法ヲ批判スル出發點トシテ其收容方法特ニ、患者監視方法ノ如何ヲ述べザル可カラズ。

患者收容所ハ三階ノ建築ニシテ階下ヲ事務室其他トシ、二三階六十坪ヲ患者收容所トナシ、三階ノ一部ニ診療室ヲ置キ露台ヲ散步場トシ男女室ヲ區別セリ、室内ノ設備ハ支那人ノ生活狀態ニ準ゼリ、收容患者ノ行動ニ就キテハ所内ハ自由ニ行動セシメ外出ハ許サザルヲ本則トスルモ、事由アル者ニハ時間其他ノ條件ヲ附シテ認メ居レリ、患者ト訪問客トノ面會モ時間ヲ定メ自由ニ爲サシメ居レリ、治療ノ途中苦痛ヲ訴ヘ退所ヲ希望スル者アレバ、一應忍耐スベキ旨ヲ忠告スル程度ニ止メ強制セズ、常態ニ於テ自己ノ制止心ヲ以テ忍耐シ得ル自然ノ治癒ヲ期待シ居レリ。

然レドモ一方麻藥嗜好心ヲ誘發スル動機ハ治療ノ助成トシテ、努メテ之ヲ避ケザル可カラズ、之レ阿片「モルヒネ」中毒者ハ麻藥並ニ其使用器具ニ對シ、精神頗ル過敏ニシテ使用器具ヲ一覽シ又ハ麻藥名ヲ聽クノミニシテ、欲求ノ念ヲ喚起シ易キヲ以テナリ、幸ニ收容室ハ二階三階ナルヲ以テ外界ノ刺激ニ觸ル、コト少ナク、外部ト絶テ特殊ノ生活狀態トナリ、自然麻藥欲求ノ念ニ遠ザカル傾向ヲ有ス、診療中ニ使用スル阿片麻藥ハ之ヲ多數患者ノ目ニ觸レザル階下ニ於テ、其患者ニノミ投ズルコト、セリ、然レドモ時ニ不良ノ徒アリ外部ヨリ手引シ、麻藥ヲ使用シ又ハ供給スルモノアリ、之等ハ發見次第退所セシメ居レリ、目下所員トシテ醫師、藥劑師各一名、事務員二名、助手小使二名アリテ收容患者ノ行動ニ對シ、不斷ノ觀察ヲナシ體重ノ關係、顔容、動作等ニヨリ麻藥使用ノ疑ヒアルモノ、發見ニ努メ居レリ。

而シテ他方麻藥以外ノ娛樂的嗜好ニ導クコトモ、又精神的欲求ノ轉換方法トシテ極メテ重要ナルヲ思ヒ、麻藥以外ノ嗜好品ハ悉ク之ヲ自由ニシ、特ニ酒類ノ使用ヲ認メ遊戲的娛樂法モ法ニ觸レザル限り、他人ノ妨害トナラザル限り自由ニセリ。勞働作業モ亦麻藥ニ對スル執着ヲ轉ズルニ有力ナルハ言ヲ俟タザルモ、現在ノ設備ニ於テハ實現シ得ザルヲ遺憾トス。

收容患者ノ榮養ニ就キテハ、本療法ノ目的ヨリ考フル時ハ充分ナルモノヲ供給スベキモノナルガ、又他方退所後ノ生活狀態ト餘リニ懸隔アルハ、其向フ所ヲ誤ラシメ却テ不幸ノ結果ヲ招來スルヲ慮リ、平素ノ生活狀態ニ近カラン事ヲ期シ、支那人ノ常食ヲ主トシ朝夕二食ヲ供シ居レリ、今獻立ノ一例十人分ノ數量ヲ舉グレバ第一六表ノ如シ。

第一六表 食事獻立表 (十人量ニシテ最上ノ例)

	主食(玉蜀黍) (饅頭)	粥(支那米)	野菜	肉魚類	支那ソーメン	豆腐	漬物
朝食	七斤半	二斤半	七斤	—	百匁	—	八十匁
夕食	七斤半	二斤半	七斤	半斤	—	二斤	八十匁

收容患者ハ常時二十名ヲ定員トシ、申込順ニヨリ退所者アル毎ニ補充收容シツ、アリ、目下申込者常ニ定員ニ超過シツ、アルハ、治療希望者ノ本療法ヲ信賴スル證差ト

認ムルコトヲ得ベシ。

診療ノ方法

患者ノ主訴ニヨリ麻藥使用ノ年數期間、一日ノ使用量ヲ調査シ、診療中ニ使用スベキ麻藥量ヲ定メ、身體各部一應ノ診察ヲ爲シ反射機能ヲ檢シ、榮養狀態特ニ體重及握力ハ診療ノ經過、全治退所ノ決定、麻藥密用ノ調査等ニ關係大ナルヲ以テ、治療開始前ヨリ連續觀察ヲ要ス。

內臟性ノ傳染性疾患ナク重症ノ心臟、腎臟ヲ診セザレバ入所セシメ、毎日一回小澤氏變質劑四〇・〇c.cヲ前膊靜脈内ニ注射シ、入所ノ日ヨリ禁斷症狀ヲ起サザル程度ニ麻藥ヲ與ヘ、漸減シツ、診療ヲ持續ス、經過中下痢、不眠症等ニ對稱的療法ヲ施シ、屢々合併症トシテ有スル「モルヒネ」注射部位ノ化膿、皮膚病、花柳病ニ對スル局所的手當ヲ要ス、而シテ麻藥全廢後四五日間ニシテ身體ノ動作常態トナリ、體重、握力増加ノ徵ヲ示スカ、何等ノ苦痛ナク麻藥欲求ノ狀ナキニ至レバ、全治ト看做シ退所セシム。

サレバ本療法ハ監視ノ程度ニヨリ診療經過ニ大ナル影響アルコト勿論ニシテ、監視ヲ嚴ニシ麻藥ニ對スル苦痛ノ忍耐ヲ強制スレバ、麻藥使用期間、入所期間ヲ更ニ短縮シ得ルモノナリ。
更ニ診療ニ當リ阿片「モルヒネ」中毒ニ陷リシ動機ニ留意スルヲ要ス。

第一七表 麻藥使用動機別表

使用目的別	大正十三年	大正十四年	大正十五年 (昭和元年)	昭和二年	計
疾病治療目的	一八六	四四四	二八〇	三七五	一、二八五
娛樂用	一一	七〇	三〇	四二	一五九
交際用	六	一四	一八	九	四七
合計	二〇三	五三八	三二八	四二五	一、四九三

此動機ニ就キ入所患者ニテ調査シタル結果ハ第一七表ノ如クニシテ、千四百九十一名中、千二百八十五名八六・一八%ハ疾病治療ノ目的ヲ以テ使用シタルニ出發セリ、依テ中毒年數短キ患者ニ對シテハ其疾病ヲ探究シテ治療シ、阿片「モルヒネ」ハ疾病根本治療藥ニアラ

ザルコトヲ說示スルコトヲ要ス、然ラザレバ再ビ中毒ニ陷ルノ機ヲ作ルベシ。

診療經過ノ大要

治療開始直後ハ全身ノ變調ヲ來シ、不快ノ感ヲ訴ヘ食欲減少シ尿量モ少ク排尿全クナキ事アリ、從テ體重、握力共ニ減少ヲ來ス、健康者ニ本劑ノ注射ハ寧ロ全身ノ快感ヲ覺エシムル點ヨリ、此全身症狀ハ主トシテ麻藥減少ヨリ來ルモノト認メザルベカラズ、然レドモ二三日ニシテ常態ニ復シ、麻藥漸減シテ全ク廢止スルトキニ至リ、再ビ全身ノ變調ヲ訴フルガ直ニ回復シ、四、五日ニシテ何等ノ苦痛ナク、麻藥ニ對スル執着ナク榮養増進ノ徵ヲ表ハシ全治ト看做シ得ルニ至ル。

經過中脈搏、體溫ハ全身變調時動搖スルモノアリ、夢精甚シキヲ訴フル者アリ、下痢ヲ訴フル者比較的多ク時ニ腸ノ疼痛ヲ訴フル者アリ、全身變調時ニ於テ關節痛、膀胱部壓重ノ感アルヲ訴フル者アリ、不眠症ヲ訴フル者比較的多シ。

麻藥ニ對スル執着ノ念ハ最後ノ廢止期ニ於テ最モ甚シク、漸次其念ヲ去ルト雖モ榮養増進ノ恢復全治期ニ於テモ、個性ニヨリ相當欲求ノ念アル者アルヲ以テ、個性ニ對シ充分ノ觀察ヲナシ、全治期ヲ決定セザルベカラズ。

收容患者ニ合併症トシテ皮膚疾患、花柳病、注射部位ノ化膿、肥厚等ヲ見ルコト比較的多キガ、局處手當ヲナセバ退所期迄ニ全治スル者多シ。

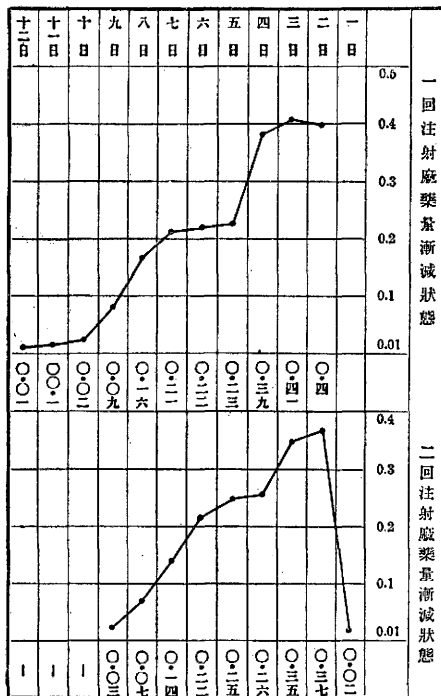
個々ノ症狀

靜脈注射、本劑ヲ靜脈注入スルヤ「カルシウム」劑注射ト等シク、直ニ咽頭舌ニ溫感ヲ來シ次デ陰部四肢ニ起シ遂ニ全身ニ溫感アリ、婦人ニ於テハ臍部ノ周圍ニ著シト云フ、最初ノ注射ニヨリ船量狀ノ感ヲ訴フル者アルモ暫時ニシテ回復ス、本療法開始以來異常ナル症狀ヲ起シタル者ナク全然安全ナルモノナリ、本劑ハ無色透明ナルヲ以テ容器ニ注意ヲ要ス、曾テ誤リテ3%石炭酸水四〇〇ccヲ注入シ終リ暫時苦悶シタルコトアリ、又「アルコール」ヲ誤リテ注入シ

疼痛激シク、中止シタル出來事アリシモ幸ニ支障ナカリシト云フ。

麻藥ノ使用、麻藥ハ阿片中毒者ニハ阿片丁幾ヲ投ジ、「モルヒネ」中毒者ニハ一%「モルヒネ」ヲ注射シ居レリ、使用量ハ患者ノ主訴ヲ標準トシテ定メ入所前ニ比シ體質ニヨリ増減スルモ、大約十分ノ一以下ヲ使用ス、京城ノ周防氏ハ禁斷症狀ヲ起サシメ中毒量ヲ定メ、之ヲ標準トシテ漸減スル方法ヲ採レリ、當所ハ苦痛ヲ強制セザル主旨ヨリ患者ノ主訴ヲ標準トシ漸減スルモノニシテ、顔容、動作ノ狀況ニヨリ麻藥量ヲ減ジ大ナル支障ナシ、之レ後ニ收容患者成績ノ項ニ於テ述ブル如ク、麻藥ノ漸減量ハ中毒ノ程度ニ關係ナク、寧ろ個人ノ性ニ關係スルモノト認メラル、ヲ以テナリ、本劑一日一回注射ト、一日二回注射例各十例ノ一日麻藥使用平均量ノ比較ヲ示セバ第一圖ノ如クニシテ、一日一回注射ニ於テハ第一日ハ午後入所者多キヲ以テ、麻藥使用量少ナク、二日三日四日大差ナク五日目ニ著シク減少シ、七日目ヨリ十日迄ノ間ニ急激ニ減少シ十二日ニテ廢止ス、一日二回注射例ノ平均ニ於テハ四日目ニ著シク減少シ、六日目ヨリ更ニ減少シ、九日ニシテ全廢スルニ至ル、即チ二回注射ニテハ一日早ク減少ヲ始メ、全使用期間三日ヲ短縮シ得、此事實ハ麻藥廢止ニヨル苦痛ヲ緩和スル作用アルヲ推定シ得ベシ。

圖一第 圖少減藥麻用療治



體溫、體溫ハ全經過ヲ通ジ臨床觀察患者二十名ノ日々ノ體溫平均ハ、第二圖並ニ第四圖(二回注射)ニ示スガ如ク特ニ注目スベキ點ナシ、然レドモ個人ニ就キ觀察スル時ハ第三圖ニ示スガ如ク、入所直後並ニ麻藥廢止時期ニ於テ動搖シ、其他天候ノ關係曇天、氣壓變調ノ際ハ上昇シ三十七度以上トナリ頗ル過敏ナリ。

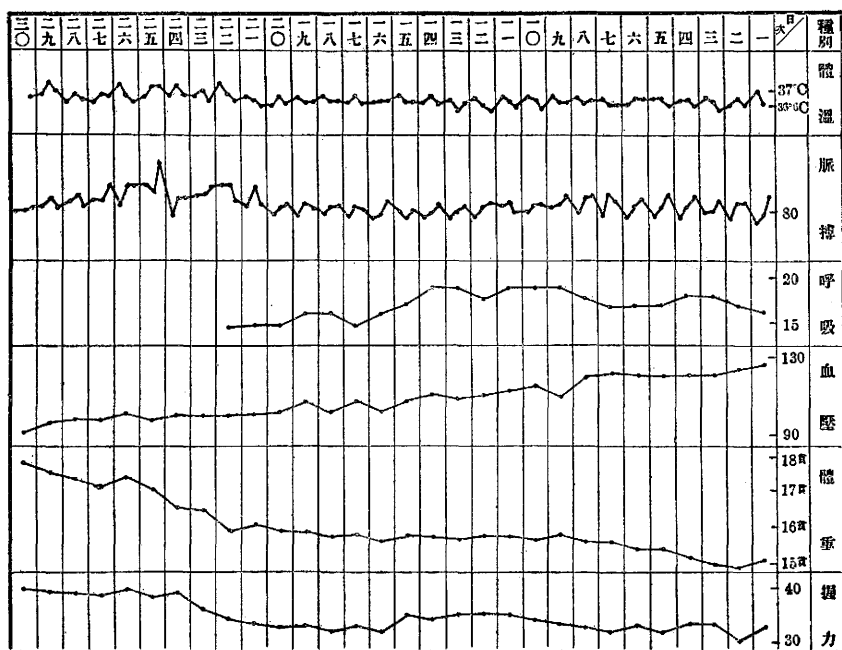
脈搏、脈搏ハ本劑注射直後六一〇ヲ減ジ一時間乃至二時間ニシテ整調ナル、全經過ヲ通ジ脈搏數多クシテ常ニ八〇乃至九〇ヲ算シ(第二圖第四圖)、體溫ト等シク氣象並ニ全身變調ノ時期、其他身體僅カノ異常ニ依リ頻數トナル、

個々ニ觀察スレバ第三圖ノ如ク變調期ノ明カナルモノ多シ。

呼吸、呼吸數ハ入所當時少數ナルガ、經過ノ途中呼吸數ヲ増シ後更ニ減少ス、平均數(第二圖)個人(第三圖)共ニ然ルヲ見ル、其理由明カナラズ中途藥劑ト刺激ニヨリ増加シ、後耐性ヲ得テ平常ニ復スルモノト解スベキカ。

血壓、血壓ハ觀察患者ノ平均(第二圖)ニ於テモ經過中漸次減少シ、最モ多キハ三〇ヲ減ズ、個人例(第三圖)ニ於テモ三〇餘ヲ減ジ、五日目迄ハ急速ニ減少シ十三日目迄平衡ニシテ、十三日目ニ再減少シ後平衡ヲ保ツ二日二回注射ノ平均(第四圖)ニ於テハ四日目迄急速ニ減少シ、後増加シ八日目ヨリ漸次減少シ最モ多キハ一二〇餘ヲ減ズ、治療廢止後ノ血壓ハ重要ナル意義アルモ未ダ調査ノ機ナシ。體重、體重ハ平均數(第二圖)ニ於テハ入所後一

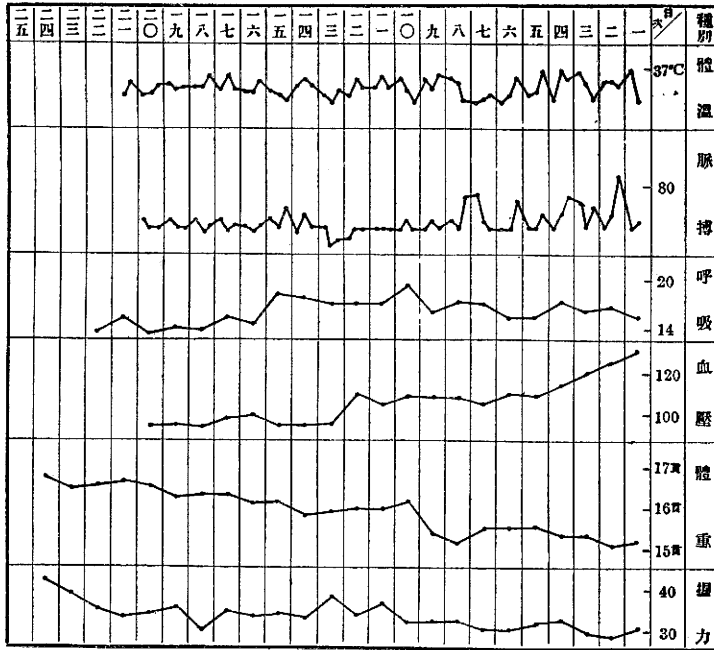
圖二第 圖均平項事察觀床臨ノ例十二



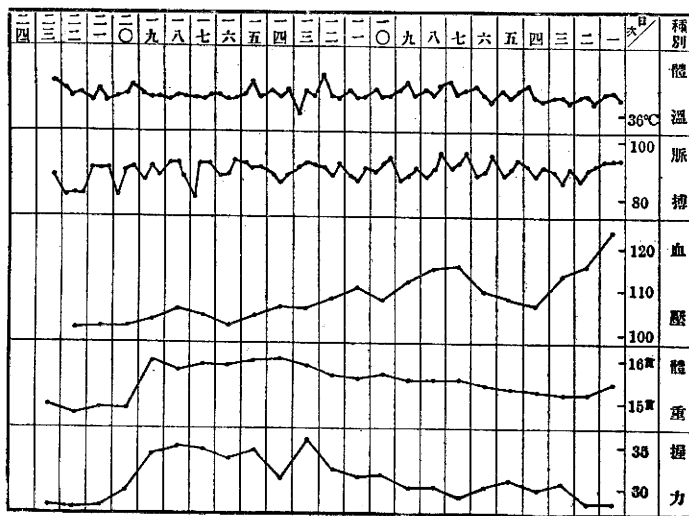
時減少シ、五日目ヨリ漸次増加シ二十三日目ヨリ急速ニ増加ス、最モ多キハ入所中二貫七百多ヲ増加シタル者アリ、

個人例(第三圖)ニ於テモ大體増加ヲ見ルガ、經過中一時的ニ減少スルハ不眠症、夢精、下痢等ニ依ル場合多シ、一日二回注射(第四圖)ニ於テハ入所後減少シ、七日目ヨリ漸次増加シ十四日目迄ニ平均四百々ラ増加シタルガ、十五日目ヨリ減少ス、下痢等ノ合併症ニヨル、少數ナルモ體重減少スルモノアリ、收容患者全成績ノ項ニ於テ述ベシ。

第三圖 個人例ノ臨床觀察事項



第四圖 二回注射例ノ平均臨床觀察事項



握力、握力ハ大體ニ於テ體重ト平行シ、經過中麻藥廢止期ニ一時的減少ヲ見ル。體溫、脈搏、呼吸、血壓、體重、握力ノ狀態ヲ一日一回注射患者ノ平均、同個人例、一日二回注射患者ノ平均ニ分

チ波線ヲ以テ示セバ第二圖第三圖及第四圖ノ如シ。

消化器、消化器ニ就テハ、入所直後食欲減少シ麻藥ノ減量過グルトキハ飲料ヲモ取ラザルコトアリ、然レドモ二三
日ニシテ平常ニ復ス、便通ハ多クシテ一日一回注射ニ於テハ、第一八表ノ如ク一日平均二回ノ便通アリ、一日二回注
射ニ於テハ第一九表ノ如ク平均二—四回ノ便通アリ下痢便モ多シ、

表八—第 表通便射注回一

患者名	入院日次	厲從	呂蓋	王希	荆學	石仁	衛文	金武	陳王	王鴻	來成	一日平均
一	一	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1
二	二	2	2	2	2	1	1	2	1	2	4	2
三	三	2	2	3	1	4	2	2	2	2	2	2
四	四	2	2	4	1	2	2	3	2	2	1	2
五	五	2	1	1	2	2	2	3	2	2	3	2
六	六	2	1	1	4	2	2	1	2	2	2	2
七	七	2	2	1	3	2	3	1	2	2	2	2
八	八	2	3	2	2	2	1	2	3	2	1	2
九	九	2	2	2	2	1	4	3	3	3	1	2
一〇	一〇	2	2	2	2	2	3	2	2	2	1	2
一一	一一	3	4	1	1	2	3	2	2	1	1	2
一二	一二	2	3	2	2	4	2	2	1	1	1	2
一三	一三	1	1	1	2	2	2	2	1	1	1	2
一四	一四	1	2	1	2	1	2	3	1	1	1	2
一五	一五	2	2	4	4	2	2	3	1	1	1	2
一六	一六	3	2	3	1	2	1	1	1	1	1	2
一七	一七	5	3	1	1	1	1	1	1	1	1	2
一八	一八	5	2	2	2	1	1	1	1	1	1	2
一九	一九	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
二〇	二〇	4	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2
二一	二一	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
二二	二二	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
二三	二三	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2

而シテ時ニ下痢甚シク腸ノ疼痛ヲ訴ヘ處置ヲ乞フ者アリ、斯ク下痢多キニ拘ラズ一般症狀ニ影響少ナク、甚シキ場
合體重ノ減少ヲ見ルニ過ギズ、此點ハ注目スベキ現象ニシテ便通多キ理由ハ、注射回数ノ増加ニヨリ症狀ノ變化スル
ヲ以テ、腸内ニ排泄スル沃度、砒素ノ刺激ニヨルモノト解スルヲ至當トスベシ。

尿ノ排泄、本劑ノ使用ニヨリ腎臟ニ影響アルヤ否ヤハ其使用方法ニ考慮ヲ要スルヲ以テ、多數患者ニ就キ使用前、

蛋白、糖ヲ検査シ、便ニ治療ヲ終リ退所時再検査シタルガ、蛋白、糖ヲ檢出シタルモノナシ。

表九一第 表通便射注回二

患者名	入院日次	丁	鄭	郭	李	江	王	鄭	李	閻	王	一日平均
一	一	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
二	2	1	2	1	1	2	1	1	2	2	2	1
三	3	2	1	1	1	2	2	2	2	1	3	2
四	4	1	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2
五	5	4	3	3	13	2	2	1	2	2	4	4
六	6	2	3	8	2	2	2	2	3	2	5	3
七	7	2	2	4	2	1	1	2	3	2	5	2
八	8	2	6	6	2	2	12	2	3	2	4	4
九	9	2	2	9	2	2	13	2	2	2	5	4
一〇	10	2	2	2	2	2	2	2	3	2	4	2
一一	11	2	1	1	2	2	3	4	3	1	5	2
一二	12	1	1	2	2	3	3	5	2	2	3	3
一三	13	1	1	1	2	1	4	1	7	2	4	3
一四	14	1	1	1	1	3	11	2	5	2	2	2
一五	15	1	1	1	1	1	4	2	7	1	2	3
一六	16	1	1	1	1	1	3	2	1	2	1	2
一七	17	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2
一八	18	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1
一九	19	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	1
二〇	20	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	1
二一	21	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
二二	22	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
二三	23	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

第二〇表 治療前後ノ尿量表

患者名	治療前一日尿量	治療開始一日尿量	増加量	減少量
王德	1950	1150	800	1
孫廷	1030	1150	120	1
王禮	1100	1130	30	1
明劉	1100	1160	60	1
孫文	1100	1150	50	1
王剛	1100	1150	50	1
遲維	1400	1600	200	1
龐書	1100	700	400	1
丁	1500	1000	500	1
王室	1500	1000	500	1
平均	1150	1180	350	1

尿量ハ入所第二日ニ於テ減少ス、即チ

第二〇表ニ示スガ如ク十名ニ就キ治療開始前一日ノ全尿量ト、治療開始第一日ノ全尿量ヲ比較スルニ、増加シタル者一名ニシテ九名ハ減少シ一人平均三五六瓦ヲ減ズ、之レ全身變調ヲ來シ、飲料ヲ多ク採ラザルニヨルモノト考ヘラル。

治療繼續中ノ尿量ハ第二一表ニ示ス如ク、二、三日間ハ或ハ増シ或ハ減ジ四、五日ニシテ漸次増加シ、一週間ニシテ最モ多シ、而シテ排尿ハ晝間ニ少ナク夜間ニ多シ、サレバ經過半期後ニ於テハ夜間三、四回ヨリ七、八回排尿スル者アリ、之レ不眠症ニ關係ヲ有スル者ナラン、全身變調期ノ尿排泄モ又變調ヲ來シ、全身ノ順調期ニ至リ排泄多ク順調ナルハ、新陳代謝ノ良好ニ導ケル兆ト考察セザルベカラズ、而シテ排尿個々ノ關係ニ就テハ、尿量、比重ト注射劑排

第二一表 治療中尿量表

入所次	患者名	一	二	三	四	五	六	七	八
李	占	一四〇〇	一五〇〇	五四〇	一五六〇	一七〇〇	一七〇〇	二四〇〇	二八〇〇
王	金	一〇〇	七〇〇	六〇〇	一六〇	一八〇〇	二四四〇	三六〇〇	二〇〇〇
丁	輝	六〇〇	九〇〇	一一〇〇	八〇〇	二四九〇	二〇六〇	三三〇〇	一四〇〇
江	敦	九〇〇	七〇〇	六〇〇	九〇〇	一〇〇〇	六八〇	九五〇	二二〇〇
李	秀	八〇〇	一一〇〇	一七〇〇	一一〇〇	一一七〇	二五〇	一五七〇	一五七〇
計		三九〇〇	五九〇〇	四七五〇	五六四〇	八七〇	八四〇	一六〇〇	八二〇〇
平	均	七六〇	一二六〇	九七五	一一二八	一六四〇	一六八	二二四〇	二四二〇

泄ノ關係ハ新陳代謝ニ意義多キヲ思フモノナリ、即チ第二一表ニ示ス如ク、注射後第一回ニ排泄スル尿ハ一般ニ比重高ク、例外ハ存スルモ排泄ノ度重ナルニ從テ其比重ヲ減ズ、尿中沃度、砒素モ注射後一、二回ハ多量ニ排泄スルモ其程度並ニ回ヲ重ヌルニ從テ、比重ト平行セザル點並ニ、小澤氏變質劑其物ノ比重ヨリ考ヘテ、此比重ノ關係ハ新陳代謝ヲ注射ニヨリ旺盛ナラシメ、漸次常ニ復スル現象ト解セラル

ベシ。

生殖器、阿片「モルヒネ」中毒者ハ多ク、生殖機能消失スルモノニシテ、解剖ノ報告ハ生殖腺ノ變化ニ歸セリ、然ルニ療法開始後其機能回復ス、最初之ヲ以テ退行變成セル組織機能ヲ回復シタルモノトシ、奇蹟的ニ考ヘタルガ詳細ニ觀察シ、使用麻藥廢止ニヨリ起ルモノナルコトヲ知レリ、本療法ヲ施サザルモ回復スルヲ以テナリ、治療中麻藥ヲ減少スレバ機能ヲ回復シ、一時甚シク夢精ヲ訴フルコト第二三表ニ示ス如クニシテ、入所第一日ニシテ訴フルモノアリ、三日四日五日目ニ於テ其人員ノ半數ハ之ヲ訴ヘ、二週間内ハ人員ノ四割ニ見ルモノニシテ、夢精一日ノ回数モ異常ニシテ一日三、四回ヲ訴フル者アリ、女子ニ在リテハ容易ニ告ゲザルモ、閉止セル月經ノ來潮スル者アルハ事實ナリ。

然シテ本劑ハ寧ロ麻藥廢止ニヨリ、興奮シタル生殖機能ヲ正常トスル作用アルコトハ、夢精異常回数者ニ一日二回本劑ノ注射ヲ行ヒタルニ停止シタルト、「ウイリアムキャンデー」ナル阿片中毒治療劑ヲ試用シタルニ、患者ハ皆夢精多キ爲メ小澤氏變質劑ヲ希望シタルヲ以テ明カナリ。

表二二第 尿量・比重・尿沃度素ノ關係表

注射後排泄順	尿量 比重 沃度	尿			尿			尿			尿		
		量	重	度(上)	量	重	度(上)	量	重	度(上)	量	重	度(上)
一	尿量比重沃度	二四	二	廿	二四	二	廿	二四	二	廿	二四	二	廿
二		四七	二	十	五〇	二	十	三〇	二	十	三〇	二	十
三		四〇〇	二	十	四〇	二	十	三〇	二	十	三〇	二	十
四		四一〇	二	一	一四	二	一	一四	二	一	一四	二	一
五		二〇〇	二	一	一六	二	一	一六	二	一	一六	二	一
一	尿量比重沃度	二〇〇	二	廿	二〇	二	廿	二〇	二	廿	二〇	二	廿
二		二〇〇	二	廿	二〇	二	廿	二〇	二	廿	二〇	二	廿
三		一〇〇	二	廿	一〇	二	廿	一〇	二	廿	一〇	二	廿
四		二〇〇	二	廿	二〇	二	廿	二〇	二	廿	二〇	二	廿
五		四七	二	十	五〇	二	十	三〇	二	十	三〇	二	十
六	尿量比重沃度	三〇〇	二	七	九	二	七	九	二	七	九	二	七
七		三〇〇	二	七	九	二	七	九	二	七	九	二	七
八		三〇〇	二	七	九	二	七	九	二	七	九	二	七
九		三〇〇	二	七	九	二	七	九	二	七	九	二	七
十		三〇〇	二	七	九	二	七	九	二	七	九	二	七
患者	尿量比重沃度	二〇〇	二	十	二〇	二	十	二〇	二	十	二〇	二	十
患者		二〇〇	二	十	二〇	二	十	二〇	二	十	二〇	二	十
患者		二〇〇	二	十	二〇	二	十	二〇	二	十	二〇	二	十
患者		二〇〇	二	十	二〇	二	十	二〇	二	十	二〇	二	十
患者		二〇〇	二	十	二〇	二	十	二〇	二	十	二〇	二	十

反射機能、阿片「モルヒネ」中毒者ハ反射機能亢進スルモノニシテ、本療法ニヨリ幾分減少スルガ如キ例アルモ斷定的成績ヲ示シ難シ、瞳孔反應ハ鈍ナル者多キモ本療法ニヨリ特ニ見ル可キ處見ナカリキ。

表數回精夢中療治 表三二第

人員合計	回数合計	事炳	盛汝	林茂	中致	堂福	安靜	祥永	庚紹	周作	王海	患者名	入院日次
4	5		1		1	1		2				一	
2	3		1		2							二	
5	10	4	1		2			2	1			三	
6	9	2	1		1	2	1			2		四	
5	6		2		1		1	1	1			五	
2	2		1				1					六	
3	4		2						1		1	七	
3	4		1				1			2		八	
4	9	4					1		1	2		九	
4	5	2		1					1		1	一〇	
4	7	3			1				1	2		一一	
4	6	2			2					1	1	一二	
4	6	1			2					1	1	一三	
1	1				1							一四	
												一五	
												一六	
												一七	
												一八	
1	1				1							一九	
1	2				2							二〇	

臨床觀察ノ總括的考察

當救療所ニ收容シ強制的監視ヲ爲サズ、自己忍耐ニテ麻藥漸減スル方法ヲ採リ、榮養價ノ支那人常食ニ等シキモノヲ給シテ、本療法ヲ試ミ觀察シタル結果ハ大體ニ於イテ良好ノ經過ヲ採リ、幾分不快ノ感、不眠症等ヲ起スモノアルモ、禁斷現象等ヲ起サズ麻藥ヲ全廢スルヲ得、而シテ體重、握力ハ短期間ニ増加シ、麻藥習慣性ナキ組織ヲ急速ニ増加シ、血壓降下スルハ血管ニ彈力性組織ノ代謝セルモノト認メラレ、陳舊肥厚ヲ吸收シ、種々ナル慢性合併症ノ恢復ヲ促シ、異常生殖機能ヲ正常ニ導ク等ノ點ハ、本劑使用動機ノ一部ヲ説明スルモノト謂フベク、少ナクモ麻藥ノ漸減ニヨル不快ヲ緩和シ、麻藥習性ノ轉換ヲ助成スルノ作用ヲ有ス。

殊ニ本劑ハ一日二回注射ニヨリ麻藥使用期間ヲ著シク短縮スルコトヲ得、然レドモ之ヲ持續スレバ便通多ク下痢ヲ

起シ、爲メニ一般榮養ニ不良ノ影響ヲ及ボシ全治期ヲ遅延ス、故ニ麻藥使用中ハ二回注射トシ、藥劑倍量ヲ働カシメ急速ニ麻藥ヲ廢止セシメ、其後ハ一日一回注射トシ榮養ノ恢復ヲ標準トセバ、更ニ良好ノ成績ヲ擧ゲ得ルモノト思考ス。

要スルニ本療法ハ一種ノ漸減療法助成方法ナルヲ以テ、監視ノ如何ニヨリ治療期間ヲ短縮シ、更ニ全治率ヲ多クスルコトヲ得ルコト勿論ナルガ、同時ニ全ク監視ナキ收容所外ニ於テ本療法ヲ行ヒ、効果ヲ期スルコトハ困難ナルモノト信ズルモノナリ。

七、變質劑使用中ノ血液所見

本療法ニヨリ新陳代謝ヲ促シ爲メニ榮養増進シ、顔貌入所當時ニ比シ頗ル良好ニ赴クヲ以テ、其經過中血液ニ何等カノ變化ヲ期待シ、赤血球、白血球、血色素、補體ノ検査ヲナシタリ、血球検査ハ連日實施セント企テタルモ患者ハ

第二四表 治療前後ノ血球ト血色素 (血球ハ千單位血色素ハ%)

患者名	治 療 前	治 療 中	治 療 後
李高氏	赤血球 四五〇〇 白血球 五八〇〇 血色素 六八	赤血球 四八六六 白血球 八〇〇〇 血色素 九〇	赤血球 四七六六 白血球 六四〇〇 血色素 八四
劉甫亭	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六
張洪耀	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六
王祝三	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六
李學仁	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六
張玉堂	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六
蘇芝蘭	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六
宋門婁	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六
鄭國義	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六
來招蘭	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六	赤血球 四八六六 白血球 一三八〇〇 血色素 六六

之ヲ嫌忌シ、中途退所スルモノ續出シタルヲ以テ五日目ヨリ隔日トシ、中途退所者繼續ノ意味ニ於テ治療日次ニ相當スルモノヲ補充シ、大體ノ觀察ヲ爲スコトヲ得タリ、

入所時ト退所時ノ血球、血色素ヲ十例ニ就テ、比較スルニ第二四表ノ如クニシテ、赤血球數ハ退所時ニ増加シタル者六名、減少シタル者四名、白血球ハ退所時ニ増加シタル者同ジク六名、減少シタル者四名ナリト雖モ後者ノ増加セル程度ハ大ナリ、血色素ハ一名ヲ除外全部増加セリ、Gehrig, Bulland, ハ白血球増加スト云フ Achard, Loeper, ハ白血球減少スト云ヘ mammel, ハ變化ナシト報告セルニ徴シ、動搖多クシテ確定シ難キモノナルヲ信ズルモノナリ、更ニ經過中ノ各々ニ就キ述ブベシ。

赤血球

赤血球ノ觀察九例ノ二十一日間ノ成績ハ、第二五表ノ如クニシテ三例ハ治療ノ前半ノミヲ示シ、完全ニ退所シタル者ハ六例ナリ、其内三例ハ退所時ニ増加シ三例ハ減少セリ、全經過ヲ通ジテ検査シタル胡寶山ニ就テ見ルニ治療開始時減少シ、後増加シ再ビ減少スル傾向アリト雖モ、大體ニ於テ特ニ認ムベキ變化ナシトスルヲ適當トスベシ。

第二五表 赤血球數表 (千單位)

日次	患者氏名	王壽臣	干大鴻	姚崇雲	胡寶山	鄭國義	林玉山	來招蘭	李運堂	徐振邦	平均
第一日		五,〇八〇	四,七〇〇	三,六六六	五,八四八	四,〇〇〇	五,八〇〇	四,八四八	四,四四四	四,二六六	四,七五九
第二日		四,八〇〇	五,二六六	五,〇〇〇	五,四七三						五,一三三
第三日		五,一九三	四,五五六	四,三三四	五,一六〇						四,七七六
第四日		五,六三三	三,七〇〇		五,五〇〇						四,九八四
第五日		五,一七三	四,〇〇〇		五,六六六				五,三七六		五,〇〇九
第六日		四,四八八	四,六〇〇		五,七〇〇				四,三八四		四,五八三
第七日		四,二五六			五,〇八八	四,七六六	五,二六八	六,九六〇	四,〇〇八	四,四〇〇	五,〇二五

比 較	第十一 日	第十四 日	第十六 日	第十八 日	第二十 日	第二十一 日
	五、三六	六、二四八	五、六七三	五、二六	四、八八〇	五、三三四
	三、八五六	三、六九六	五、一六八	三、八五六	四、二九六	四、六六六
	六、二四八	五、七二三	六、二八〇	五、一〇	五、六〇八	
	五、五五三	五、〇六四	四、二〇	五、五五六		
	四、三六〇	四、一三〇	四、二七三	四、〇〇八	四、二八	四、六〇八
	四、四四	四、六四	三、九八六	三、七六	四、六四八	
	四、九四六	四、九七	四、九一六	四、五八五	四、七二	四、八四三

白血球

白血球數ハ九例中完全治療セル六例ニ就テ見ルニ第二六表ノ如ク、四例ハ退所時ニ増加シ、一例ハ前日迄増加シタルモ退所ノ日ニ減少シ一例ハ減少セリ、依テ白血球數ハ大體ニ於テ、本療法ニヨリ増加ノ傾向ヲ有スルモノト認メ得ベシ。

第二六表 白血球數 (千單位)

氏 名	王壽臣	千大鴻	姚崇雲	胡寶山	鄭國義	林玉山	來招蘭	李運堂	徐振邦	平均
第一 日	五、四〇〇	六、〇〇〇	七、六〇〇	四、六〇〇	六、三〇〇	九、〇〇〇	七、一〇〇	一〇、八〇〇	六、一〇〇	七、〇〇〇
第二 日	七、〇〇〇	六、六〇〇	五、五〇〇	六、八〇〇						六、四七五
第三 日	五、一〇〇	六、一〇〇	七、一〇〇	四、〇〇〇						五、七五〇
第四 日	七、二〇〇	九、一〇〇		七、一〇〇						八、〇〇〇
第五 日	四、八〇〇	七、一〇〇		六、四〇〇				九、六〇〇	九、四〇〇	七、四八〇
第七 日	五、八〇〇	九、六〇〇		七、〇〇〇				七、六〇〇	八、八〇〇	七、九二〇
第九 日	八、四〇〇			二、一〇〇	一四、六〇〇	一、〇〇〇	七、四〇〇	九、八〇〇	二、〇〇〇	一〇、六二九
第十一 日				二、八〇〇	一〇、一〇〇	六、〇〇〇	六、八〇〇	二、四〇〇	八、四〇〇	九、二六七

比 較	第 二 十 一 日	第 二 十 日	第 十 八 日	第 十 六 日	第 十 四 日
	八、四〇〇	四、八〇〇	七、四〇〇	三、六〇〇	六、〇〇〇
	六、八〇〇	九、四〇〇	三、〇〇〇	一〇、六〇〇	二、六〇〇
		二、四〇〇	二、八〇〇	二、一〇〇	二、八〇〇
			六、八〇〇	七、一〇〇	五、六〇〇
	九、二〇〇	二、〇〇〇	二、四〇〇	一六、二〇〇	一三、六〇〇
		七、六〇〇	七、八〇〇	八、〇〇〇	六、八〇〇
	八、一三三	九、〇五六	一〇、〇〇〇	一一、一三三	九、四〇〇

更ニ白血球ノ種類ニ就テハ第二七表ノ如ク、各種類ノ數ニ著シキ差アリテ定率ナク、入所時ト退所時ノ比較ニ於テモ或ハ増シ、或ハ減ジ定マレル所見ナシ、只退所ニ於テ「プラスマス」細胞ノ出現シタルヲ認ムルノミ、而シテ白血球種

表七二第 白血球種類 (%)

種 類	入 所 時					退 所 時				
	中 性 多 核 白 血 球	淋 巴 細 胞	大 單 核 移 行 性	エ オ シ ン 嗜 好 性	鹽 基 性	中 性 多 核 白 血 球	淋 巴 細 胞	大 單 核 移 行 性	エ オ シ ン 嗜 好 性	鹽 基 性
劉	五	四	一	一	一	五	四	三	一	二
李	四	四	七	八	一	六	四	三	四	一
林	七	三	五	四	一	五	三	三	五	一
劉甫	三	三	三	二	一	五	三	八	二	一
王	六	五	四	一	一	六	六	五	二	一
李學	五	五	五	三	二	六	三	六	一	一
張	七	二	五	五	一	七	三	九	一	二
蘇	五	四	二	三	二	五	四	七	一	一
候	七	六	一	一	一	八	七	二	一	一

類ノ各ニ就テ治療經過ニ伴フ觀察ハ第二八表ヨリ第三二表ニ見ル如クニシテ、經過中中性多核白血球ハ一度ハ増加シ

ニ一回發見セシノミ、之亦特ニ意義アル所見ナシ、「プラスマ」細胞ニ至リテハ四例ノ退所時ニ發見セシノミ。

表八二第

(%) 數 胞 細 巴 淋 表九二第

日次	患者	一日	二日	三日	四日	五日	七日	九日	十一日	十四日	十六日	十八日	廿日	廿一日	廿三日
胡	王	千	姚	鄭	林	來	李	徐	三	四	五	六	七	八	九
王	千	姚	鄭	林	來	李	徐	三	四	五	六	七	八	九	十
千	姚	鄭	林	來	李	徐	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
姚	鄭	林	來	李	徐	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
鄭	林	來	李	徐	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三
林	來	李	徐	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
來	李	徐	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五
李	徐	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六
徐	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七
三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八
四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九
五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一
七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二
八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三
九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四
十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五
十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六
十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七
十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八
十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九
十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十

表 二 三 第

(%) 數胞細性基鹽

廿三 日	廿二 日	廿一 日	十八 日	十六 日	十四 日	十一 日	九日 日	七日 日	五 日	四 日	三 日	二 日	一 日	日次 患者
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	胡
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	王
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	千
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	姚
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	鄭
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	林
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	來
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	李
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	徐

表 〇 三 第

(%) 數型行移核單大

廿三 日	廿二 日	廿一 日	十八 日	十六 日	十四 日	十一 日	九日 日	七日 日	五 日	四 日	三 日	二 日	一 日	日次 患者
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	胡
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	王
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	千
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	姚
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	鄭
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	林
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	來
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	李
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	徐

表 一 三 第

(%) 數胞細性好嗜ンシオエ

廿三 日	廿二 日	廿一 日	十八 日	十六 日	十四 日	十一 日	九日 日	七日 日	五 日	四 日	三 日	二 日	一 日	日次 患者
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	胡
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	王
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	千
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	姚
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	鄭
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	林
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	來
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	李
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	徐

血色素

血色素ノ九例ノ觀察ハ第三二表ニ見ル如ク治療中途ニ於テモ増加ノ成績ヲ表シ、退所ニ近クニ從テ増加ノ傾向ヲ認メ得ベク、減少シタルハ一例ニ過ギズ、患者顔色ノ良好トナル事實ニ徴シ當然ノコトニ屬ス。

第三三表 血色素率(%)

氏名	入院日次	第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十	第十一	第十二	入院當時平均	合計	員數	平均	日毎之増減
王壽臣	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	九	九	九	九	一
千大鴻	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	八	八	八	八	一
姚崇雲	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	七	七	七	七	一
胡寶山	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	六	六	六	六	一
鄭國義	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	五	五	五	五	一
林玉山	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	四	四	四	四	一
來招蘭	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	三	三	三	三	一
李雲堂	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	二	二	二	二	一
徐振邦	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	一	一	一	一	一
合計		七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	九	九	九	九	一
員數		九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	一
平均		九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	一
日毎之増減		一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

第三四表 補體測定表

患者名	補治療前	日治數	補治療後
徐振	〇〇〇 七七八九	二六	〇〇〇 七七八九
李運	〇〇〇 七七八九	三	〇〇〇 七七八九
劉甫	〇〇〇 七七八九	三	〇〇〇 七七八九
張洪	〇〇〇 七七八九	三	〇〇〇 七七八九
來招	〇〇〇 七七八九	二八	〇〇〇 七七八九
王祝	〇〇〇 七七八九	二七	〇〇〇 七七八九
李學	〇〇〇 七七八九	三	〇〇〇 七七八九
鈴木	〇〇〇 七七八九		〇〇〇 七七八九
健康者	〇〇〇 七七八九		〇〇〇 七七八九
安藤	〇〇〇 七七八九		〇〇〇 七七八九

補體ノ測定
治療經過中ノ補體ニ變化アランカト推シ、入所當時治療開始前ト退所時ニ採血シ補體ヲ測定シタルガ、第三四表ノ如ク補體ヲ完全溶解トシ、(一)ヲ不溶解、(十)ヲ其中間ノ度ヲ表ハスモノトスレバ、入所時ト退所時ニ於テ差ヲ認メズ、又比較セル健康人ト差ナキヲ知ルベシ。

八、救療所收容患者治療成績

大正十三年九月一日當所開始以來、昭和三年三月末日迄三ヶ年七ヶ月間ニ收容治療シタル者、累計千六百〇一名ニシテ内千二百〇七名(七六・二%)ハ全治退所シ、三百七十四名(二三・七%)ハ中途退所シ、現在二十名ノ治療ヲ繼續シ居レリ、其收容患者ノ年次別第三五表ノ如シ、之等收容患者ノ治療成績ヲ各方面ヨリ統計的ニ觀察シ、順次記述セン

第三五表 收容患者年次別表

年次別	入所人員	退所人員	全治退院	中途退院
自大正十三年九月至同 年十二月	二〇三	一八三	一三四	二〇
大正十四年中	五八	五八	五八	〇
大正十五年中	三三	三三	三三	〇
昭和二年中	四五	四七	四二	三
昭和三年一月至同 年三月	二〇	二〇	二〇	〇
合 計	一六二	一五八	一五七	三七

第三六表 阿片癮者ト「モルヒネ」中毒者治療率

	總數	全治者	中途退院者	全治率
阿片癮者	二三四	九三	二三	七六・〇%
モルヒネ中毒者	三九	二九	一〇	六九・〇%
合 計	一四三	一二二	二一	七六・一〇%

全治率ノ關係

阿片癮者ト「モルヒネ」中毒者ノ全治率、阿片癮者ハ「モルヒネ」中毒者ニ比シ、中毒ノ程度弱クシテ榮養等ノ犯サル、者少ナシ、從テ其恢復率モ良好ニシテ、千四百七十三名ニ就キ其關係ヲ見ルニ第三六表ノ如クニシテ、阿片癮者ニ於テ七九・六二%ヲ恢復スルニ對シ、「モルヒネ」中毒者ハ六四・六〇%ヲ恢復スルニ過ギズ。國籍別ニヨル全治率、全治率ヲ國籍別二千三百十一名ニ就キ見ルニ第三七表ノ如クニシテ、支那人ノ全治率七六・〇四%ニシテ良好ノ成績ナルニ、日本人六四・七%、朝鮮人六〇・〇%ナリ、勿論日本人、朝鮮人ノ診療實數少數ナルヲ以テ、眞ノ診療率ト云フ能ハザル

モ日本人ノ入所者ハ我儘多ク、忍耐乏シク診療方法ヲ批判セントシテ來ル者アリ、成績概シテ不良ノ傾向アリ。

第三七表 國籍別ト全治關係表

國人別	全治者		中途退院者	計	總計ニ對スル全治率
	男	女	男	女	
支那人	九二	五四	六五	一五	三〇四 二六九 六、〇四%
朝鮮人	一四	一	二五	一〇	二五 一〇、〇〇%
日本人	八	三	二	五	一七 六、七%
計	九三	五八	九二	一六	三〇 二二一 七、五%

テ高齢者ニ多ク、四十五歳ヨリ四十九歳ニ至ル者最モ良ク八六・九二%ヲ示ス、是レ中毒ヲ治療セザルベカラズトスル自覺ヨリ、麻藥ニ對スル忍耐ニヨルモノト解スルハ至當ナランカ。

第三八表 年齢別ト全治率

年齢別	區別	支那人		朝鮮人		日本人		計	總計ニ對スル百分率	全治者數	中退院者數	計ニ對スル全治率
		男	女	男	女	男	女					
自三十九歳至四十歳	七	八	三	一	一	一	一	九	〇、六	四	五	四四、四四
自四十歳至四十一歳	八	一五	三	一	一	一	一	九	六、六	六	六	七三、三四
自四十一歳至四十二歳	一八	二五	一	一	一	一	一	二五	一五、四	三	三	六四、元
自四十二歳至四十三歳	二二	二九	一	一	一	一	一	二九	一九、八	一三	七	七三、八四
自四十三歳至四十四歳	二二	二九	一	一	一	一	一	二九	一九、八	一三	七	七三、八四
自四十四歳至四十五歳	二二	二九	一	一	一	一	一	二九	一九、八	一三	七	七三、八四
自四十五歳至四十六歳	二二	二九	一	一	一	一	一	二九	一九、八	一三	七	七三、八四
自四十六歳至四十七歳	二二	二九	一	一	一	一	一	二九	一九、八	一三	七	七三、八四
自四十七歳至四十八歳	二二	二九	一	一	一	一	一	二九	一九、八	一三	七	七三、八四
自四十八歳至四十九歳	二二	二九	一	一	一	一	一	二九	一九、八	一三	七	七三、八四
自五十歳以上	二二	二九	一	一	一	一	一	二九	一九、八	一三	七	七三、八四
計	二二	二九	一	一	一	一	一	二九	一九、八	一三	七	七三、八四

第三九表 入所日數

全中別 日數別	全治者		中途退院者	
	全治者數	全治率	中途退院者數	中途退院率
五日以内	四	〇、四〇	一四	五、七〇
十日以内	五四	五、五五	二六	四、〇〇
十五日以内	三七	三、七三	一四	四、六六
二十日以内	三〇	三、〇七	二	〇、三三
廿五日以内	一七	一、七四	一	〇、三三
三十日以内	五	五、六五	—	—
卅五日以内	一五	一、五二	—	—
四十日以内	三	一、三	—	—
四十日以上	六	〇、六	一	〇、三
調査不明	一	〇、一〇	—	—
計	九二	一〇〇、〇〇	三〇	一〇〇、〇〇

中途退所者ノ九四三七%ハ十日以内ニ退所シ、其内五四三七%ハ五日以内ニ退所セリ、依テ十日以上在所スル者ハ、殆ド全治スル見込アルヲ示スモノニシテ、十日以上在所者ニシテ中途退所スル者アルハ、在所中密ニ麻藥ヲ求メ使用シ全治ノ見込ナキ者ナリ。

更ニ入所日數ヲ全治者年齢別ニ見ルトキハ第四〇表ノ如クニシテ、若年ニシテ長時日ヲ要スル者アリ、高齢ニシテ短期間ニ全治スル者アリ、平均シテ最若年者ハ最老年者ニ比シ入所日數短キモ、中毒者ノ間ニハ年齢ニヨル在所日數ニ大ナル意義ヲ認メズ。

中毒程度ト治療關係、概括的ニ中毒ノ程度ヲ表示スルノ標準ハ、其麻藥ヲ使用シタル年數ト每一日ノ麻藥使用量ナリ、此中毒程度表示ノ二條件ノ輕重ニヨリ、全治率、治療日數、治療中麻藥投藥日數並ニ投藥量ニ如何ナル關係ニア

入所日數ノ觀察、入所日數ハ第三九表ニ見ルガ如ク、全治者ニ於テハ十五日以内ニ退所シタル者最モ多ク三七三三%ヲ示シ、廿日以内ノ者三〇二七%、廿五日以内一七四六%、其他ハ六〇〇%以下ニシテ四十日以上ヲ費シタル者アリテ、平均一七七五日ナリ。

此全治者入所日數ハ、患者ヲシテ麻藥禁斷ノ苦痛ヲ少クスル爲メニ、比較的長時日間麻藥ヲ投シタルト、又衰弱シテ作業能力ナキ者ニ對シ、榮養恢復迄在所セシメタルニヨリ、比較的ニ長時日ヲ費シタル、若シ監視ヲ嚴ニシ麻藥投藥ノ量ヲ減ジ、禁斷ノ苦痛無キニ至リ直ニ退院セシムレバ、遙ニ在所日數ヲ短縮シ得ルコト、臨床觀察ノ條ニ述ベタルガ如シ。

ルヤハ、治療ノ方針ニ關係アルヲ以テ各條件毎ニ觀察記述スベシ。

第四〇表 全治者年齢別ニヨル治療日數表

年 齡	入所日數					
	五日 以内	十日 以内	十五日 以内	廿日 以内	廿五日 以内	平均 日數
十九歳以下	一	一	一	一	一	三、元
自二〇歳至二四歳	一	四	三	一	一	一八、三
自二五歳至二九歳	一	七	五	四	一六	一七、三
自三〇歳至三四歳	二	三	七	五	三	一七、八
自三五歳至三九歳	一	二	六	五	三	一七、九
自四〇歳至四四歳	一	二	六	三	九	一七、六
自四五歳至四九歳	一	一	四	三	四	一八、〇
五〇歳以上	一	三	三	六	七	一八、三
計	四	一六	三九	二〇〇	一七五	三二、五

治率ヲ同表ニ見ルニ、一年未満使用者ト十五年使用者ト大差ナク、二十五年使用者全治率最良ナル等區々ニシテ、麻藥使用年數ハ全治率ニ關係ナシト認ムルヲ得ベシ。

麻藥使用年數ト治療日數、全治者ガ治療ニ要セシ期間ハ第四二表ニ見ル如クニシテ、麻藥使用期間長キ者必シモ治療期間長カラズ、一年未満ノ使用者ニシテ尙且ツ三十日以上入所セシ者アリ、三十年以上ノ使用者ニシテ十五日以内ニ退所シタル者アリ、治療平均日數ニ於テモ、何等中毒年數ニ關係ナキモノト認メ得ベシ。

麻藥使用年數ト治療中麻藥投藥日數、中毒年數ニ對スル治療用麻藥投藥日數ハ第四三表ニ見ル如クニシテ、二十年以上ノ使用者ニシテ五日以内ニ停止シタル者アリ、一年以下ノ使用者ニシテ尙十六日以上投藥シタル者アリ、平均投藥量ニ於テモ年數ト何等關係ナキヲ認メ得ベシ。

麻藥使用ノ年數ト全治率（麻藥量ノ算出ハ阿片ノ量ヲ基準トシタルヲ以テ從テ「モルヒネ」ハ阿片中一〇・〇〇％ニ含有スルヲ普通トスルヲ以テ其率ニ換算セリ以下麻藥トセルハ其意義ナリ）、入所前麻藥ヲ使用シタル年數別ハ第四一表ニ見ル如クニシテ、四年以内ノ使用者大多數ヲ占メ千三百十名中七百四十五名ノ過半數ヲ有ス、是レ中毒ニ陷ルヤ早クモ其害ヲ自覺シ、治療ヲ求メントスル傾向ヲ窺ヒ得ベシ、而シテ麻藥使用年數別ニヨリ其全

而シテ全平均麻藥使用日數ハ七六一日ナルヲ以テ普通診療上ニハ麻藥投與ヲ八日間トシ、九日目ヨリ全然廢止スルヲ適當トスベシ。

第四表 前所入ニ於ケル麻藥ノ使用年數ト全治率

年數別	全治者	中途退院者	總計	全治率
一年未満	一五	一八	三三	七・五
二年以下	一三〇	一〇	一四〇	九・三
三年以下	一七六	一〇	一八六	九・五
四年以下	一七	一〇	二七	七・五
五年以下	一七	一〇	二七	七・五
六年以下	一七	一〇	二七	七・五
七年以下	一七	一〇	二七	七・五
八年以下	一七	一〇	二七	七・五
九年以下	一七	一〇	二七	七・五
十年以下	一七	一〇	二七	七・五
十五年以下	一七	一〇	二七	七・五
二十年以下	一七	一〇	二七	七・五
二十五年以下	一七	一〇	二七	七・五
三十年以下	一七	一〇	二七	七・五
三十五年以下	一七	一〇	二七	七・五
計	九〇	三〇	一二〇	七・五

第四表二 前所入ニ於ケル麻藥ノ使用年數ト日數

年數別	五日以内	十日以内	十五日以内	廿日以内	廿五日以内	卅日以内	卅日以上	平均日數
一年未満	一	一	一	一	一	一	一	一・五
二年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
三年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
四年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
五年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
六年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
七年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
八年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
九年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
十年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
十五年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
二十年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
二十五年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
三十年以下	一	一	一	一	一	一	一	一・五
卅年以上	一	一	一	一	一	一	一	一・五
計	一	一	一	一	一	一	一	一・五

麻藥使用年數ト治療中麻藥投藥量、中毒年數ト治療用麻藥投藥量ハ第四表ニ見ル如クニシテ、三十年以上ノ麻藥使用者ニシテ、〇・五以下ノ投藥ニテ足リタル者、又全ク投藥セザリシ者アリ、一年以下ノ使用者ニシテ尙五〇以上ノ投藥ヲ要シタル者アリ、平均使用量ニ於テモ二十年以上ノ使用者ト大差ナキ等、中毒年數ト治療

率治全ト量用使ノ日一藥麻時當所入 表五四第

全中別 數量別	全治者		中途退院者		計		計ニ對スル全治率
	數	率	數	率	數	率	
一・〇以下	二九	二・九三	一六	五・〇〇	四五	三・四三	六四・四四
二・〇	八〇	八・〇七	三三	一〇・〇〇	一一三	九・二〇	七・四四
三・〇	四七	四・七四	二二	六・五六	六九	五・二六	六・二二
四・〇	二七	二・八二	四〇	一二・五〇	一五七	一二・八七	七四・五二
五・〇	一五	一・五四	五一	一五・九四	二四四	一五・四六	七五・〇〇
六・〇	八五	八・五八	二九	九・〇六	一二五	八・六七	七三・九二
七・〇	二四	二・四二	七三	二三・八二	三三三	二五・六六	六六・六八
八・〇	一五	一・五三	五	一・五六	二〇	一・五三	七五・〇〇
九・〇	二三	二・二三	四	一・二五	二六	一・二三	七五・〇〇
一〇・〇	六	六・〇五	九	二・八二	一五	一・一六	八八・二三
一〇・〇	五四	五・五四	二六	五・〇〇	七〇	五・三三	七・一四
一一・〇	四	四・四	六	一・八七	一〇	三・五七	八七・三
一二・〇	一七	一・七三	三	〇・九四	二〇	一・五三	八五・〇〇
一四・〇	九	〇・九	三	〇・九四	一二	〇・九二	五五・〇〇
一七・〇	一五	一・五三	六	一・八七	二一	一・六〇	七・四四
二〇・〇	二三	二・三	四	一・二五	二七	一・二九	六・四七
二五・〇	一	〇・一〇	一	〇・三三	二	〇・一五	五〇・〇〇
三〇・〇	二	〇・二〇	一	〇・三三	三	〇・三三	六・七
三三・〇	一	〇・一〇	一	〇・三三	二	〇・一五	五〇・〇〇
四〇・〇	一	〇・一〇	一	〇・三三	二	〇・一五	五〇・〇〇
四〇・〇以上	一	〇・一〇	一	〇・三三	二	〇・一五	五〇・〇〇
調査不明	一	〇・一〇	一	〇・三三	二	〇・一五	五〇・〇〇
合計	九一	一〇〇・〇〇	三三〇	一〇〇・〇〇	一三三	一〇〇・〇〇	一

更ニ中毒程度ヲ表示スル入所當時一日ノ麻藥使用量ト治療關係ヲ觀察スベシ。

入所當時一日ノ麻藥使用量ト全治率、中毒者ノ一日ノ麻藥使用量ハ第四五表ニ見ル如ク、二・〇ヨリ七・〇ヲ使用スル者多クシテ、其全治率ニ至リテハ一・〇以下ノ使用者ハ八・二三％ノ全治率ナルニ、九・〇以下ハ却テ全治率不良ニシテ、一・〇以下使用者ニ至リテハ六四・四四％ニ足ラザル現象ヲ示シ、一・〇以上ノ使用者ノ全治率モ區々タリ、即チ麻藥中毒量ト全治率ニ關係少ナキヲ認メ得ベシ。

入所當時一日ノ麻藥使用量ト全治者治療日數、麻藥ノ使用量ニヨル中毒程度ト治療日數ノ關係ハ、第四六表ニ見ル如ク二・〇未滿ノ使用者ニシテ治療三十日以上ヲ要シタル者アリ、三・〇使用者ニシテ十日以内ニ全治シタル者アリ、平均日數ニ於テモ三・〇未滿ハ少ナキモ其他ハ大差ナク、大體ニ於

第四六表
所用藥劑一日之使用量と入院日數（全治者）

第四七表
入所當時ノ麻藥ノ使用量ト治療
中麻藥ヲ用ヒタル日數（全治者）

數量別	人員		實人		平均	
	日數別	以內	以內	以內	以內	日數
三〇未滿	一	五	三	一	一	五、二
六〇以下	二	五	二	一	一	一、四
一〇〇以下	一	一	一	一	一	一、三
一七〇以下	一	一	一	一	一	一、三
三〇〇以下	一	一	一	一	一	一、三
三〇〇以上	一	一	一	一	一	一、三
計及平均	四	五	三	一	一	七、七

數量別	日數別		平均日數
	實人	員數	
三〇以下	五	三	八・九
六〇以下	二五	七	六・七
一〇〇以下	七	二五	六・六
一七〇以下	三	八	六・八
三〇〇以下	一	二	七・四
三〇〇以上	一	一	九・二
計及平均	七・六	二・〇	七・六

入所當時ニ於ケル麻藥ノ使用量ト
治療中麻藥ヲ用ヒタル數量(全治者)

[illegible]

入所當時一日ノ麻藥使用量ト治療用麻藥投藥日數、中毒麻藥量ト治療用麻藥投藥日數トノ關係ハ第四七表ニ見ル如ク、三〇以下ノ使用者ニシテ十六日以上投藥シタル者アリ、三〇以上ノ使用者ニシテ五日以内ニ停止シタル者アリ、一七〇以上三〇〇以下使用者ニシテ全然投藥セザル者アリ、平均日數ニ於テモ使用中毒量最モ少ナキ者、比較的長時日麻藥投藥ヲ要シタル等、麻藥中毒量ト治療用麻藥投藥日數ニ關係ナキヲ認メ得ベシ。

入所當時一日ノ麻藥使用量ト治療用麻藥ノ投藥量、中毒麻藥量ト治療用麻藥投藥量トノ關係ハ第四八表ニ見ル如ク、三・〇以下ノ中毒量ニシテ五・〇以上ノ麻藥ヲ投シタル者アリ、三・〇以下中毒量ニシテ五・〇以內ニテ足リタル者アリ、平均投藥量ニ於テモ、中毒量ノ最少、最多ノ者最も多ク投藥ヲ要シ、其中間者ニハ少量ニテ足リタル現象ヲ示シ、大體ニ於テ中毒量ト治療用投藥量ニ關係少ナキモノト認メ得ベシ。

以上各條件ヲ觀察スルニ中毒程度ト治療條件トハ、全然關係ナキヲ斷定シ得ベシ。

體重ノ觀察

體重ノ増減ハ大要ヲ臨床觀察ノ項ニ於テ述ベタルガ、本療法ヲ批判スル上ニ新陳代謝關係ヲ説明スルニ、多數ノ個人關係ナキ統計的觀察ハ、最も重要ナルモノナルヲ以テ、體重ノ増減ヲ調査シ得タル千〇十四名ニ就キ觀察スベシ。

第四九表 體重増減率表

計	中途退所	全治	總人員		
			增加人員	減少人員	増減ナキ人員
實數 一〇四	實數 四	實數 九五	九五	七	九六
百分率 八、五	百分率 三、三	百分率 八、三	七、六	七、六	二〇、二

増減ノ人員率ハ第四九表ニ見ル如ク、八一・五六%ハ増加シ、九六・六%ハ増減ナク、減少シタル者ハ八・八七%ニシテ大多數ハ増加ス、而シテ全治者ノミニ就キ見ルトキハ、増加者並ニ増減ナキ人員ヲ増シ、減少スル者ハ七・四六%ニ過ギズ、殆ド増加スルモノトシテ可ナリ。

中途退所者ハ退所時告グズシテ去ル者多キヲ以テ、調査不能ノ者多ク其真相ヲ表ハスモノト云フ能ハザルモ、中途退所者ニシテ體重ノ減少者人員三六・七四%アリ、全治者ノ其ニ比シ約五倍ノ率ヲ示スハ、生來ノ體質ノ本療法ニ對シ適セザル素質ヲ有スル者ト説明シ得ベシ。

體重増加ノ増減ノ程度ハ第五〇表ニ見ル如ク、全治者ノ體重増加者七百九十五名中、四百名ヲ増シタル者最も多ク九十九名一二・四五%ニシテ、三百名ハ九十八名一二・三三%、二百名ハ九十五名一一・九五%、百名ハ八十八名一一・〇

七%ニ次ギ、五百匁八十名一〇・〇六%ヨリ順次重量多キ程數ヲ減ジ、一貫四百匁ヲ増ス者七名〇・八八%トナリ、一貫五百匁ヨリ二貫匁以上増加スルモノアリ、平均シテ一人五七・二二六匁ヲ増加セリ。

第五〇表 體重増減程度表

數量別	中全増減別		全		治		者		中		途		退		院		者	
	増加數	増加率	減少數	減少率	増加數	増加率	減少數	減少率	増加數	増加率	減少數	減少率	増加數	増加率	減少數	減少率	増加數	増加率
一〇〇匁以下	八	二・〇七	二	二七・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
二〇〇匁	五	二・九五	二	二七・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
三〇〇匁	九	二・三三	二	二七・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
四〇〇匁	九	二・三三	二	二七・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
五〇〇匁	八	二・〇六	三	四・七	四	五・〇	二	二二・二	三	三・七	一	一六・七	四	五・〇	二	二二・二	三	三・七
六〇〇匁	六	一・五	四	五・〇	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
七〇〇匁	五	一・六	一	一六・七	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
八〇〇匁	五	一・五	一	一六・七	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
九〇〇匁	三	四・九	一	一六・七	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
一、〇〇〇匁	三	三・四	一	一六・七	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
一、一〇〇匁	三	三・七	一	一六・七	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
一、二〇〇匁	一	一・七	一	一六・七	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
一、三〇〇匁	二	一・五	一	一六・七	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
一、四〇〇匁	七	一・八	一	一六・七	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
一、五〇〇匁	二	一・八	一	一六・七	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
二、〇〇〇匁	二	二・五	一	一六・七	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
二、〇〇〇以上	六	〇・七	一	一六・七	一	一六・七	一	一六・七	二	二・〇	一	一六・七	三	三・七	一	一六・七	二	二・〇
合 計	七五	一〇〇・〇〇	七	一〇〇・〇〇	三	一〇〇・〇〇	一八	一〇〇・〇〇	二	一〇〇・〇〇	一	一〇〇・〇〇	三	一〇〇・〇〇	一	一〇〇・〇〇	二	一〇〇・〇〇

減少者ハ七十二名中百匁二百匁ヲ減少セル者最モ多ク、各二十名二七・七七%ニシテ三百匁ヲ減ジタル者十名一三八・九%、四百匁六百匁五百匁之ニ次ギ、其以上ノ重量ノ減少者少ナキモ尙一貫二百匁、一貫五百匁ヲ減ジタル者アリ。

中途退所者中體重増加者三十一名、中十二名三八・七〇%ハ百匁ヲ増シ最高八百匁ヲ増シタル者アリ、減少者十八名中最モ減ジタルハ百匁ノ五名二七・二七%、五百匁減ノ四名二・二二%ニシテ、八百匁ヲ減ジタル者アリ。

事實ト反對ニ、一貫、一貫五百匁ヲ減ズル事實ニヨリ、單ニ榮養並ニ身體ノ安逸ニ歸セシムル能ハズ、本劑ノ作用ト月内外ノ短期間ニ一貫、二貫ヲ増ス體重増加減少程度ヲ見ルニ、一箇

個人ノ素質ニ考フルヲ適當トス。

更ニ全治者ノ増加體重ト治療日數トノ關係ハ第五一表ノ如クニシテ、人員ニ於テハ十五日以内、二十日以内ノ者多

表一五第 全治者增加體重ト治療日數

體重	入所日數						平均日數
	以內	十日	十五日	廿日	廿五日	卅日	
一〇〇以內	八	二	九	六	二	二	一五、二
二〇〇〃	四	四	四	三	三	一	一五、九
三〇〇〃	三	三	三	三	一	一	一六、三
四〇〇〃	二	三	三	三	一	一	一六、八
五〇〇〃	三	三	三	三	一	一	一七、七
六〇〇〃	三	三	三	三	一	一	一八、五
七〇〇〃	三	三	三	三	一	一	一九、九
八〇〇〃	三	三	三	三	一	一	二〇、六
九〇〇〃	三	三	三	三	一	一	二〇、九
一、〇〇〇〃	三	三	三	三	一	一	二一、二
一、一〇〇〃	三	三	三	三	一	一	二一、五
一、二〇〇〃	三	三	三	三	一	一	二一、八
一、三〇〇〃	三	三	三	三	一	一	二二、一
一、四〇〇〃	三	三	三	三	一	一	二二、四
一、五〇〇〃	三	三	三	三	一	一	二二、七
二、〇〇〇〃	三	三	三	三	一	一	二三、〇
二、〇〇〇以上	三	三	三	三	一	一	二三、三
計	三八	二七	二五	一六	一四	一三	一八、二

表二五第 全治者減少體重ト治療日數

體重	入所日數						平均日數
	以內	十日	十五日	廿日	廿五日	卅日	
一〇〇以內	一	二	七	九	六	二	一七、八
二〇〇〃	一	二	四	三	三	一	一六、二
三〇〇〃	一	二	二	一	一	一	一六、四
四〇〇〃	一	二	一	一	一	一	一六、六
五〇〇〃	一	二	一	一	一	一	一六、八
六〇〇〃	一	二	一	一	一	一	一七、〇
七〇〇〃	一	二	一	一	一	一	一七、二
八〇〇〃	一	二	一	一	一	一	一七、四
九〇〇〃	一	二	一	一	一	一	一七、六
一、〇〇〇〃	一	二	一	一	一	一	一七、八
一、一〇〇〃	一	二	一	一	一	一	一八、〇
一、二〇〇〃	一	二	一	一	一	一	一八、二
一、五〇〇〃	一	二	一	一	一	一	一八、四
計	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一七、七

重量ニ比例シ、在所日數ノ長キ者ハ減少ノ程度多キ現象ヲ呈ス、之レ本療法ノ體質ニヨリ適不適ヲ一層明カニ表示ス

ルモノト云フベシ。

合併症ト治療中ノ主訴障害

收容患者ノ合併症ハ千三百十一名ニ就キ調査スルニ、其内二百二十八名一七三九%ハ合併症ヲ有ス、而シテ其病類

表三五第 合併症ト治療日數表

病類	入院日數							計	百分率
	五日以内	十日以内	十五日以内	二十日以内	廿五日以内	卅日以内	卅日以上		
外科疾患	一	五	二	九	二	五	七	五九	二五・八八
肺氣腫	三	五	八	七	六	四	三	三六	一六・七〇
氣管支炎喘息	二	七	八	七	八	一	二	三六	一五・三五
消化器疾患	一	四	五	七	一	一	一	二六	一二・四〇
肺炎カタル	一	一	八	七	二	一	一	二四	一一・〇三
循環器病	一	一	五	一	六	一	一	一三	五・七〇
感冒	一	一	一	一	一	一	一	七	三・三〇
其ノ他ノ内臟病	二	一	一	一	一	一	一	八	三・五二
眼疾	一	一	一	一	一	一	一	七	三・一九
梅毒	一	一	一	一	一	一	一	七	三・一九
傳染性皮膚病	一	一	一	一	一	一	一	七	三・一九
其他ノ疾患	一	一	一	一	一	一	一	七	三・一九
計	二三	二四	五三	五四	四四	二六	一六	三六	一〇〇・〇〇

ハ第五三表ニ見ル如ク、外科的疾患最も多ク二五・八八%ヲ占ム、之レ皮膚ノ創傷ニ對シ不潔ナル處置ヲ爲シ平然タルト、「モルヒネ」中毒者ハ無消毒ニテ注射スルニヨリ化膿ヲ起スヲ以テナリ、次ハ肺氣腫ニシテ一六・六七%ヲ占メ、氣管支炎喘息ノ一五・三五%、消化器疾患ノ一一・四〇%、肺炎カタル一〇・五三%、循環器ノ五・七〇%ノ順ニシテ、呼吸器疾患多キハ注目ヲ要シ、之等ハ本劑ノ療法ニヨリ良好ノ經過ヲ取リツ、アリ、而シテ之等ノ合併症ヲ有スル者ノ收容日數ハ、全般ノ其

ニ比シ長時日ヲ要シ、二百二十八名中十五日未滿五十二名、二十日未滿五十四名ニシテ、二十日以上收容セル者八十六名三七・七二%アリ。

治療中ノ主訴ハ第五四表ニ見ル如ク、千三百十一名中百四十一名一〇・七五%ハ障害ヲ訴ヘ、對稱的處置ヲ爲シタルモノニシテ、其病類中下痢及腸炎ノ九十二名、胃炎及胃痛ノ三十名ヲ合セテ、消化器障害ハ八六・五二%ヲ占ム、不眠

症ハ處置ヲ要シタルモノ九名ナルガ、處置ヲ要スル程度ニ至ラザル者ハ可ナリ多數ナリ、其他ノ障害ハ偶然ニ來リシモノト認メラル、モノニシテ、急性肺炎ノ一例モ本療法ニヨリ起リタルモノト信ズル能ハズ、而シテ之等ノ處置ヲ要スル者ハ收容日數多クシテ、二十日以上ヲ要スルモノ三七五九%ニシテ、合併症ヲ有スル者ト近似ノ治療日數ヲ要ス。

第五四表 治療中ノ主訴障害ト治療日數表

	十日以内	十五日以内	廿日以内	廿五日以内	三十日以内	三十日以上	計	率
下痢、腸炎	三	元	二七	三	七	五	二六	六五、二四
胃炎、胃痛	二	二〇	七	八	一	二	三〇	三、二六
不眠症	一	三	二	二	一	一	九	六、三六
頭痛	一	一	一	一	一	一	六	二、一三
感冒、發熱	一	一	一	一	一	一	六	二、一三
下肢疼痛	一	一	一	一	一	一	六	二、一三
月經困難	一	一	一	一	一	一	六	二、一三
急性肺炎	一	一	一	一	一	一	六	二、一三
計	七	四	三七	三五	九	九	一四一	一〇〇、〇〇

第五五表 前回退院ヨリ入院ニ至ル期間表

人員	期間別	計
四	六ヶ月以下	一〇
一〇	六ヶ月以上一年以下	七
一三	一年以上二年以下	一三
四	二年以上三年以下	四
三	三年以上四年以下	三
一	四年以上五年以下	一
四二	五年以上	四二
	計	一〇二

第五六表 退院後麻藥ヲ使用セザル期間表

人員	期間別	計
八	引續使用	八
二	一ヶ月以下	二
二	二ヶ月以下	二
三	三ヶ月以下	三
一	四ヶ月以下	一
二	五ヶ月以下	二
一	六ヶ月以下	一
二	七ヶ月以下	二
二	八ヶ月以下	二
二	一年以上	二
二	計	二

此結果ハ一時全治シテモ、麻藥ノ習慣性嗜好ノ轉換ハ容易ニ非ザルコトヲ示スモノナルガ、再ビ治療ヲ乞フニ至ル點ハ麻藥ニ對スル自覺ト、彼等ノ本療法ニ對スル信賴ヲ認メ得ベシ。

生殖器機能

麻藥中毒ニヨリ荒廢シタル生殖器機能ハ、本療法ニヨリ回復スルコトハ患者ノ自訴ニヨリ得タル處ニシテ、第五七表ニ見ル如ク患者ノ本療法ニ對シ多トスル處ナルモ、臨床觀察ノ項ニ於テ述ベタル如ク精細ニ觀察スルトキハ、麻藥廢止ニヨル現象ニシテ、解剖的變化アル生殖器ニ、其機能ヲ回復スルヤ否ヤ不明ナリ。

第五七表 陰萎月經回復ノ調査表

	支那人	朝鮮人	日本人	計
月經回復ノ明言	五	一	一	五
陰萎回復ノ明言	六七	四	三	七四
計	七二	四	三	七九

職業ト治療トノ關係

職業ノ別ハ其種類ノ區分ニヨリ、一種ノ體質ヲ表示スルモノト考フルコトヲ得ルガ故ニ、職業ヲ勞作ノ程度性質ニヨリ八種類ニ大別シ、職業ノ判明セル者六百九十三名ニ就キ、治療日數ヲ調査セルニ第五八表ニ見ル如ク、平均治療日數ニ於テ阿片小賣人、花柳界關係者ノ如キ、阿片ニ親ミ易キ者ハ最モ治療日數長ク、商業

店員ノ如キ業務之ニ次ギ、農夫、漁夫、屋內職人(炊事夫、裁縫業、理髮、印刷業等)行商人、勞力職工(鐵工、大工、ペンキ塗工等)智識階級ノ順ニシテ、勞作ノ最モ多キ勞働者苦力ハ最モ治療日數短カク、大體ニ於テ勤勞多キ職業從事者即チ體質ノ強壯者ハ治療日數短シ、智識階級ノ治療日數短縮セルハ、其自覺ニ基クモノト認ムベキモ、農夫、漁夫ノ治療日數長キハ例外トス。

九、小澤氏變質劑ノ他疾患ニ對スル効果

小澤氏變質劑ヲ使用シ臨床觀察ニ於テ種々ナル合併症ニ對シ頗ル有効ナルヲ經驗シ、特ニ微毒ノ症狀ヲ消失セシムルハ、本劑ノ含有成分ヨリシテ理由アルヲ思フモノナリ、其他ノ皮膚疾患ニシテ慢性的ナルモノニ對シ、變質劑トシテ豫想シタル藥理作用ヲ有スルモノト思ハシムル例症アリ、又本劑ハ「カルシウム」ヲ含有スル點ヨリ、呼吸器疾患ニ

對シ相當ノ效果ヲ認メラレツ、アリ。

表八五第 職業別ト治療日數表

職業別	治療日數	五日以内	十日以内	十五日以内	廿日以内	廿五日以内	卅日以内	卅日以上	計	平均治療日數
商業店員	一	一	二	七	四	五	一	九	二〇	一九・六
苦力、勞働者	一	一	三	四	三	二	一	四	一六	一六・五
屋內職工	一	一	五	七	四	三	九	五	二六	一八・五
勞力職工	一	一	二	三	二	一	六	四	一六	一八・八
行商人	一	一	一	一	一	一	一	一	七	一八・九
阿片小賣人	一	一	一	一	一	一	一	一	七	二〇・六
花柳界關係者	一	一	一	一	一	一	一	一	七	二〇・六
教員僧侶醫師	一	一	一	一	一	一	一	一	七	二〇・六
農夫漁夫	一	一	一	一	一	一	一	一	七	二〇・六
計	二	三	二四	一九	一六	五	六	六	六三	一八・四

ノト信ズルヲ以テ、以下實驗例ヲ舉ゲントス、只此例症ノ多數ハ入所セル阿片「モルヒネ」中毒者ノ合併症ニシテ、不定住者多ク前後ノ觀察不能ナリトシ、麻藥中毒者ノ習慣トシテ偽リ多キヲ以テ、既往症ニ於テモ不合理ノ點アリテ確實性ヲ缺クト雖モ、只觀察ノ要旨ヲ述ベ更ニ調査攻究スル處アルベシ。

微毒ノ例證

陳本祥、二十四年、一ヶ年前買淫シタル事アリシガ、八ヶ月前ヨリ下肢ニ發疹ヲ生ジタリト云フ、現在ハ下腹部以下兩下肢ニ二十四個ノ徑一cm大ノ微毒疹ヲ生ジ、黃褐色ノ痂皮ヲ附着シ右大腿內側ニ於テハ數個連續シ、混合傳染シテ溫疹狀潰瘍ヲ形成ス、而シテ更ニ四、五日前ヨリ陰莖龜頭冠狀溝內全部潰瘍トナリタリト云フ、之レ別ニ感染シタル軟性下疳ト認メラル、モ、患者ハ其既往症ヲ明言セザリキ、毎日小澤氏液二回注射シ大腿ノ潰瘍ニハ軟膏ヲ貼布シタルニ、三日目ヨリ乾燥ヲ認メ七日目ニハ殆ド乾燥ス、陰莖ノ軟性下疳ト認メラル、處ニハ消毒綳帶ヲ爲シタルニ、

而シテ本劑ノ毒性ハ動物試驗成績ニ於テ述ベタル如ク極メテ弱ク多量ニ使用スルコトヲ得。

人體ニ試ミタル今日迄ノ千六百例ニ於テハ、留意スベキ副作用ヲ見ザルモノナリ、一日二回注射ニヨリ沃度疹ト思ハル、モノ、顔面頸部ニ發疹シタル者一名アリシガ注射回數ヲ減ズル事ニヨリ消失シタリ、依テ他ノ疾患ニ對シテモ推奨スル價值アルモ

四日目ニハ既ニ分泌ヲ減ジ乾燥ノ傾向アルヲ以テ、「デルマトール」散布、軟膏貼布ヲナシタルニ漸次良好ノ經過ヲ取リ、十二日ニシテ全治退所セリ。

房文泰、三十年、既往ノ感染ノ機會時期ヲ明言セザルガ、頂部ニ徑一cm大ノ微毒性丘疹ト認メラル、モノ三個アリ、周圍ハ肉牙増殖シ中央ニ小ナル黃褐色ノ痂皮ヲ附着ス、陰莖龜頭前面ノ冠狀溝ニ近ク徑半cmノ潰瘍アリ、毎日小澤氏液二回注射シツ、頂部ノ患部ニハ軟膏ヲ貼布シ、龜頭ニ消毒繃帶ヲナシタルニ八日目ニハ著シク乾燥シ、丘疹モ吸收ヲ認メタルガ、顔面頸部ニ沃度疹ト認メラル、モノ發生シタルヲ以テ、一回注射トナシタルニ沃度疹モ吸收シ全經過二週間ニテ退所セリ。

軟性下疳ノ例症

候同車、二十五年、一ヶ月前賣笑婦ニ接シタルコトアリシガ、八日程前ヨリ損傷潰瘍ヲ起シタリト云フ、現在症トシテ陰莖繫帶ノ部分ニ徑半cm位ノ圓形潰瘍アリ、底面餘リニ不潔ナラズ右側鼠蹊腺ニ長徑四cm、横徑二cm橢圓狀ノ横痃ヲ生ズ、周圍ハ發赤腫張シ中央ハ化膿シテ波動ヲ呈ス、「ワッセルマン」反應「マイニッケ」反應共ニ陰性ナリ、一日一回小澤氏液ヲ注射シツ、潰瘍ニ對シ、單ニ「デルマトール」ヲ散布シ繃帶ヲナシタルニ、六日間ニテ全治セリ、横痃ニ對シテハ三日目ニ注射器ヲ以テ濃稠ナル膿、約二ccヲ吸出シ、五日目ニ約四ccヲ吸出シ、食鹽水ヲ注入シ吸出スルコト二回反復セリ、七日目ニハ稀薄水様ナル膿三ccヲ吸出シ食鹽水ノ注入吸出ヲ反復シタルガ、之ノ時既ニ周圍ノ炎症全ク去リ、深部ニ少シノ硬結ヲ殘スノ外患者ハ何等ノ感モ訴ヘザルニ至レリ、九日目ニハ只稀薄ナル血液ヲ混ズル液ヲ、少量吸出シ得ルノミニシテ同日退所セリ。

李成志、二十六年、一ヶ月前ヨリ陰莖ノ前面冠狀溝ノ中央ニ徑一cmノ圓形潰瘍アリ、底面深ク侵蝕シ極メテ汚穢ノ黃綠色ノ分泌物ヲ以テ被ハル、毎日小澤氏液ヲ二回注射シテ消毒繃帶ヲ爲シタルニ、一週間ニシテ分泌物減少シ底面清潔トナリタルヲ以テ軟膏ヲ貼布シタルガ、時恰モ支那舊曆正月ニ當リ全治ヲ待タズ退所シ、全經過ヲ見ル能ハザリ

シハ遺憾ナリ。

揚靜安、三十年、二ケ月前賣笑婦ニ接シ四日目ニ尿道ニ異狀ヲ感ジタリト云フ、尿道孔ノ下部半^{cm}龜裂シ尿道孔内兩側ニ麻實大ノ潰瘍アリ、夜間勃起ニヨリ甚シク疼痛ヲ訴フ、一日一回小澤氏液ヲ注射シ、局處ニハ「イヒチオール」「オレーフ」油塗布シタル紙綿ヲ挿入シ置キタルニ、五日ニシテ疼痛消失シ八日目ニハ左側潰瘍全治シ、十二日ニシテ右側モ治シ退所セリ。

淋疾ニ對スル試用

微毒、軟性下疳ニ効果ノ見ルベキモノアルヲ以テ、更ニ特殊婦人ノ尿道子宮ニ淋菌ヲ保有シ、容易ニ消菌セザル者三名ニ之ヲ二週間試ミシモ其結果見ルベキモノナカリキ、其經過處見第五九表ノ如シ。

皮膚疾患ノ例症

李竹軒、五十三年、十數年前ヨリ發生シタリト云フ、手掌一面ニ濕疹樣黃色ノ痂皮ヲ附着シ處々ニ徑半^{cm}大ノ皮下膿泡アリ搔痒ヲ訴フ、手掌以外ノ皮膚ニハ何等異狀ナシ、本症ノ病名判然セザルモ或ハ腺ノ異狀ニ混合感染シタルニアラザルヤヲ疑フ、小澤氏液一日一回注射シタルニ五日目頃ヨリ痂皮ノ減少ヲ認メ、二週間ニシテ全ク健康皮膚トナリ退所シタリ。

鄭有和、三十一年、「モルヒネ」中毒者ハ殆ド皮膚ニ注射癰痕ヲ見ルヲ常トスルガ、本例ハ特ニ甚シク兩上肢ノ外側ハ紫黑色ノ隆起トナリテ、硬結肥厚シ恰モ象皮病樣觀ヲ呈シ處々ニ化膿巢ヲ見タリ、毎日小澤氏液ヲ二回注射シタルニ十日目頃ヨリ肥厚ノ減少ヲ認メ、退所時ノ十九日目ニハ著シク清潔トナリ、普通「モルヒネ」中毒者ノ程度ニ回復シタリ。

金麗坤、三十一年、前例ト等シク注射癰痕ナルガ本例ハ下肢ニ於テモ甚シカリシガ、同様ノ方法ニヨリ十九日目ノ退所時ニハ著シク回復シタリ。

表績成ノ後前射注液氏澤小ルケ於ニ者患性毒淋ノ名三 表九五第

(リセ用併ンボンタ ンリセリグ ルーオチ淋宮子 入注ルーゴルタロブ%五・〇淋孔 中行施射注)

炎膜内宮子性毒淋 年三十二 齊 張				炎道尿性毒淋 年八十 田 山				炎膜内宮子性毒淋 年七十 田 横			
球白 血	淋 菌	法 療	療治 數日	球白 血	淋 菌	法 療	療治 數日	球白 血	淋 菌	法 療	療治 數日
卅	十	リグラーノオチ ンボンタニリセ	七	卅	十	ルタロブ%0.5 入注ルーゴ	四	卅	十	リグラーノオチ ンボンタニリセ	五
卅	十	〃	八	卅	十	〃	五	卅	十	〃	五
卅	十	〃	九	卅	十	〃	六	卅	十	〃	五
卅	十	〃	一〇	卅	十	〃	七	卅	一	〃	五
卅	十	〃	一一	卅	十	〃	八	卅	十	〃	六
卅	十	〃	一二	卅	十	〃	九	卅	一	〃	七
卅	十	射注液氏澤小 40 cc	(一) 三	卅	十	射注液氏澤小 40 cc	(一) 四	卅	十	〃	八
卅	十	〃	(一) 四	卅	十	〃	(二) 四	卅	一	射注液氏澤小 40 cc	(一) 九
卅	十	〃	(一) 五	卅	十	〃	(三) 四	卅	十	〃	(二) 六
卅	十	〃	(一) 六	卅	十	〃	(四) 四	卅	十	〃	(三) 六
卅	十	〃	(一) 七	卅	十	〃	(五) 四	卅	十	〃	(四) 六
卅	十	〃	(一) 八	卅	十	〃	(六) 五	卅	十	〃	(五) 六
卅	十	〃	(一) 九	卅	十	〃	(七) 五	卅	十	〃	(六) 七
卅	十	〃	(一) 一〇	卅	十	〃	(八) 七	卅	十	〃	(七) 七
卅	十	〃	(一) 一一	卅	十	〃	(九) 八	卅	十	〃	(八) 七
卅	十	〃	(一) 一二	卅	十	〃	(一〇) 九	卅	十	〃	(九) 七
卅	十	〃	(一) 一三	卅	十	〃	(一一) 九	卅	十	〃	(一〇) 六
卅	十	〃	(一) 一四	卅	十	〃	(一二) 一〇	卅	十	〃	(一一) 六
卅	十	〃	(一) 一五	卅	十	〃	(一三) 一〇	卅	十	〃	(一二) 七
卅	十	了終射注	(一) 一六	卅	十	了終射注	(一四) 一〇	卅	十	了終射注	(一三) 七
卅	十	〃	一七	卅	十	〃	一四	卅	十	〃	一七

原 著

黒井「阿片」モルヒネ」中毒者ニ對スル變質劑ノ治療成績

王延徳、五十二年、十數年前ヨリ兩下肢ニ象皮病アリ甚シク、兩肢腫大シ皮膚硬化肥厚シ褐色ヲ呈ス、一日一回注射シテ二十四日目ノ退所時ニハ著シク吸收シタリ。

安藤某、三十年、七年前ヨリ右足趾間ニ水虫アリ常ニ濕潤シ、時ニ龜裂ヲ生ジ疼痛アルコトアリト云フ、趾間ノ皮膚白色ニシテ下ニ水泡アリ、一日一回注射シテ局所ニハ亞鉛華ヲ散布セシニ、八回注射十二日ニシテ殆ド乾燥シタリ。

内科的疾患ノ例症

小澤氏ハ一般診療患者中ニ呼吸器疾患、肋膜炎、肺氣腫ニ有効ナル多數ノ例症ヲ有ス、阿片「モルヒネ」中毒者ノ救療ヲ求ムル者ハ此種ノ合併症ヲ有スル者少ナク、著明ナル例症ヲ舉グル能ハザルモ本注射料中、沃度並ニ「カルシウム」ヲ含有スル點ヨリ確効アルヲ信ズル者ナリ、小澤氏ノ經驗セル左ノ例證ノ如キ最モ興味アルモノト云フベシ。

山田ルリ子、三年、生後十二ヶ月ニシテ感冒ニ罹リ肺炎ヲ起シ、以後半年ニ涉リ微熱、咳嗽止マズ、吐乳、綠色便ヲ排泄シ且ツ盜汗アリテ、衰弱甚シク胸部ニハ全部囉音ヲ聞ク。

其母山田某女、三十三年、又産後ヨリ引續キ脚氣ト膀胱「カタル」ニテ、某醫院ノ治療ヲ受ケシモ治セズ、本注射療法ヲ受クルニ至レリ、六七回ノ注射ニヨリ排尿時ノ疼痛止ミ、尿モ清澄トナリ脚氣症狀タル浮腫・麻痺ノ感モ消失スルト共ニ、授乳シツ、アル患兒女モ發熱、盜汗止ミ囉音消失シ排便常態トナリ漸次榮養ヲ回復シ、四ヶ月後(其間十日間一回注射)ニハ肥滿ノ狀態トナレリ。

十、結 論

一、支那ノ阿片、麻藥使用ノ由來古ク民族性慣習トナリ、疾病治療用トシテ誤用セラレ、又貴賤貧富ノ別ナク人口ノ四%ハ阿片ヲ使用シ、「モルヒネ」其他ノ麻藥使用モ又多數ニ存ス、而シテ之等ノ慣習ニ對シ漸禁法令布カレテ年久シキニ係ハラズ、現今其効果ヲ期シ難キ趨勢ニアリ。

二、阿片麻藥禁止取締法令ハ現今需要供給ノ根原ヲ度外視シ、取引中絶ニ努メラル、ト雖モ、寧ロ阿片麻藥ノ生産ヲ制限シ、麻藥防止教育ト中毒者治療普及ノ最重要ナルコトヲ主張セント欲ス。

三、阿片麻藥中毒者治療ニ變質劑ヲ使用シタル文獻ナシト雖モ、麻藥習慣組織ニ新陳代謝ヲ促シ、以テ慣性轉換ヲ想定シ、沃度、砒素、「カルシウム」ノ合劑タル小澤氏變質劑靜脈注射療法ヲ、救療所治療方法トシテ採用シタリ。

四、小澤氏變質劑ハ沃度、砒素ヲ含有スト雖モ、毒力弱ク靜脈内注射用トシテ多量ニ使用シ支障ヲ認メズ。

五、靜脈内ニ注射セラレタル本劑ハ、沃度並ニ砒素ヲ標準トシテ排泄ヲ檢スルニ、主トシテ尿中ニ排泄セラレ、唾液ニハ僅ニ排泄シ殊ニ砒素ハ自然分泌ニハ證明スル能ハザルモ、酸味ヲ與ヘ人工分泌唾液中ニハ僅ニ證明ス、糞便中ニモ僅ニ證明ス、而シテ尿ノ排泄ヲ以テ考察スルニ、大部分ハ數時間ニシテ排泄シ、少量ハ長時間排泄ヲ持續スルモ、蓄積ノ傾向ヲ認メズ。

六、本療法ハ特別ノ監視ヲ爲サズ、收容所ニ於テ自己ノ耐力ニテ中毒麻藥ヲ漸減スルモノニシテ、支那人普通ノ常食ヲ給シテ收容シ、麻藥使用ヲ誘發スル動機ヲ避ケ、毎日小澤氏變質劑四〇〇c.cヲ靜脈内ニ注射シ、麻藥ヲ漸減スルモノニシテ麻藥全廢後榮養回復シ合併症治シ、麻藥欲求ノ狀態ナキモノト認メラル、モノヲ全治トシタリ。

七、麻藥漸減ノ程度ハ比較的ニシテ確タル結論ヲナシ難キモ、投藥日數ニ於テ平均七六一日、投藥量ニ於テ阿片量一八七瓦ナリ、而シテ患者ヲシテ訴少ナク經過セシメントセバ十日乃至十二日ノ投藥ヲ要シ、合併症ヲ有スルモノハ更ニ長キニ亘リ投藥ヲ要ス。

八、本療法ニ依テ血壓ヲ減ズルハ血管組織ノ代謝ヲ意味シ、特殊ノ榮養ヲ給セザルニ係ハラズ短時日ニ體重ヲ増加シ、陳舊肥厚ノ吸收ヲ見ルハ、組織代謝ノ結果ト説明スルヲ適當トスルモ、満足ナル斷定ハ實驗的研究ニ待ツベシ。

九、本療法ニヨル血液所見トシテハ赤血球數、白血球數、血色素、白血球種類ニ於テ何レモ或ハ増加シ、或ハ減少シ一定ノ現象ヲ認メズト雖モ、白血球數特ニ血色素ノ増加スルモノ比較的多シ、補體ハ何等ノ變化ナシ。

十、當救療所ニ於テ三箇年七箇月間ニ收容シタル者、一千六百〇一名ニシテ内三百七十四名ハ中途退所シタルモ、一千二百〇七名ハ全治退所シ、七六三%ノ全治率ヲ擧ゲ得タリ。

十一、阿片癮者ハ「モルヒネ」中毒者ニ比シ治シ易ク、前者ハ七九六二%ノ全治率ナルニ對シ、後者ハ六四六〇%ナリ。

十二、全治者ヲ國籍別ニ見ルトキハ、支那人七六・〇四%、日本人六四・七二%、朝鮮人六〇・〇%ノ順ナリ。

十三、年齡關係ヲ中毒者ニ見ルニ、十二歳ニシテ既ニ中毒ニ陷ル者アリ、壯年者ニ最も多キガ、其全治率ハ生理的豫想ニ反シ四十五年ヨリ四十九年ニ至ル高齡者良好ナリ、之レ其理性ニ依ル自覺ト忍耐ニ歸スベキモノナラン。

十四、治療日數ハ十五日以内ニ全治スル者最も多キガ、三十日以上ヲ要シタル者アリ、平均シテ一七七五日ナリ、然レドモ監視ノ如何ニヨリ又合併症、勞働不能等ヲ、考慮外ニ置ケバ更ニ短縮シ得ルモノナリ。

十五、中毒ノ程度ヲ麻藥使用年數ト、一日ノ使用麻藥量ヲ以テ標準トシ治療ノ難易ヲ見ルニ、治療日數、麻藥投藥量並ニ使用期間ト何等ノ關係ナク、治療ノ難易ハ中毒程度ニヨラズ寧ロ個人ノ素質ニ依ルコトヲ認メ得ベシ。

十六、治療中體重ノ増減ハ著シキ現象ニシテ、八一・五六%ノ多數ハ増加シ九六六%ハ増減ナク、減少スルモノハ八八七%ニ過ギズ、増加重量ハ四百匁ヲ増シタル者最も多數ニシテ、内ニハ二貫以上ニ及ビタル者アリ、平均五七二六匁ナリ、減少重量ハ二百匁減少者最も多數ナルガ内ニハ一貫五百匁ヲ減ジタル者アリ、而シテ増加、減少ノ比ハ治療日數ニ比例シ、増加スル者ハ日數ト共ニ増加シ減少スル者ハ日數ト共ニ益々減少ス、此事實ハ本療法ノ體質ニ適、不適ノ關係アルヲ示スモノニシテ、又一面體重ハ營養、安逸ニ歸因セズ療法ニ關係アル證差タルベシ。

十七、合併症ハ收容者ノ一七九一%ニ之ヲ有シ、呼吸器疾患大部分ヲ占メ消化器循環器ノ順ニシテ、合併症ヲ有スル者ハ治療日數比較的長シ、然レドモ本療法ニヨリ之等ニ對シテモ良好ノ經過ヲ取ルハ幸ナリ。

十八、治療中ノ主訴障害ハ收容者ノ一〇%ニ認メ、下痢及腸炎、胃炎、胃痛ノ消化器障害九二%ヲ占ム、之レ本劑

ノ腸内排泄ニヨル刺戟ニヨルモノナラン、之ニ次ギテハ不眠症ニシテ、其對照處置ヲ考慮スルノ要アリ。

十九、治療退所後ノ效果ニ就テハ、充分ナル調査ヲ爲シ難キモ一部分ノ觀察トシテハ、一九〇四%ハ直ニ麻藥ヲ使用シ、一年以内使用セザル者四五・二八%ニシテ、三五・七一%ハ一年以上使用セザルノ實狀ニシテ、中毒性轉換ノ容易ナラザルヲ知ルベシ。

二十、麻藥中毒者ノ生殖機能ハ、多數荒廢スルモノナルガ其回復ヲ喜ブ者アリ、閉止月經ノ來潮スル者アリ、然レドモ之等ハ本療法ニ依ルモノニ非ズシテ、麻藥廢止ニヨル現象ニシテ寧ロ本療法ハ麻藥廢止後ノ異常生殖機能亢進ヲ正常ニ導ク作用アリ。

二十一、體質ノ等シキ者ヲ一群トシテ職業種別ヲ區分シ、其治療日數ヲ比較スルニ阿片麻藥ニ親ミ易キ職業者ハ最も長時日ヲ要シ、勞力多キ職業程治療日數ヲ短縮ス。

二十二、本療法ハ變質劑トシテ本來ノ作用ヲ有スルヲ以テ、他ノ疾病ニモ有効ナリ、二期微毒ニ對シ效果アリ、軟性下疳ニ對シテモ著シク治療期間ヲ短縮ス、淋疾ニ對シテハ無効ナリ、其他種々ノ皮膚疾患ニ對シ頗ル有効ニシテ特ニ陳舊肥厚ヲ吸收スルコト著シ、内科的疾患ニ對シ良好ノ經過ヲ見ルハ「カルシウム」ヲ含有スルニ依ルナラン。

二十三、結論ヲ總括スルニ本變質劑ハ、阿片「モルヒネ」中毒療法ニ使用シ、漸減療法ヲ助成スル作用アリ、但シ本劑ハ此目的ニ對シ唯一ノモノト斷言スルニ非ズ、特ニ起稿中愛知醫大ノ勝沼博士ノ硫酸マグネシヤ靜脈注射治療報告ヲ見、全身組織ヲ刺戟スル方法ハ麻藥漸減ヲ助成スルニアラザルヤノ感ヲ深クス、然レドモ當地方ノ如キ合併症多キ患者ニ對シテハ、本變質劑ノ使用ヲ適當ト信ズルモノナリ。

本成績ヲ報告スルニ當リ宏濟善堂理事者ニ於テハ、豫定外ノ支出ヲナシ便宜ヲ與ヘラレ、小澤氏ハ診療用以外ニ多量ノ藥劑ヲ無償提供シ、同氏ノ經驗ヲ以テ助言セラレ、臨床觀察ニ當リテハ大連療病院長豐田博士ノ指導ト、中村敬之、森脇襄治、平田義平氏等ノ援助セラレタルニ對シ感謝シ、沃度、砒素ノ排出試験ハ滿鐵衛生研究所長金井博士ノ好意ニヨリ、同所ニ於テ中橋衛生科長指導ノ下ニ館所員援助ニヨリ、完成シ得タルコトニ對シ感謝ノ意ヲ表ス。

文 獻

- 1) 岡内半藏：世界ヲ風靡セル阿片ノ流行。 2) 野波靜雄：國際阿片問題。 3) 井上紅梅：支那風俗。 4) 臺灣總督府阿片調査所：阿片事項調査書罂粟源流考。 5) 通商局第二課：支那阿片問題攻究資料。 6) 滿鐵庶務部調査課：阿片ノ話。 7) 外務省國際阿片條約：1913. 1914. 第二第三阿片會議議定書。 8) 大正十五年關東廳統計書。 9) 第一阿片會議協定：1925. 第二阿片條約。1925.
- 10) 中島、久保田：阿片煙中ニ含マル、有効成分ニ就テ、滿洲醫學六ノ一二。 11) 堀内：慢性モルフィン中毒ノ研究、滿洲醫學會雜誌、一二ノ一〇。 12) 長尾美知：臨床藥物學。 13) 森島康太：藥物學。 14) 本草綱目。 15) 井上善次郎：内科新書。 16) 松尾：慢性「モルヒネ」中毒症、實驗醫報、一五四號。 17) 中野：「スベルマチン」ノ「モルヒネ」中毒洋驗。 18) 柴田：「オーホルミン」、
「スベルマチシ」「ヴターミン」Aノ「モルヒネ」中毒治驗、實驗治療六七。 19) 伊藤：永キ「モルヒネ」中毒ノ「スベルマチン」注射治驗、實驗治療七五號。 20) 周防：慢性モルヒネ中毒治療成績印刷物。 21) Quayle treatment. J. A. M. A. Jan. 27. 1923. 22) Lehrbuch der Therapie. innerer Krankheiten. (Krause & Gerre) 23) O. Wuth. Münch. m. Wochenschr. 70. 1923. 24) Hösslin. Münch. m. wochenschr. 71. 1924. 25) Haskell. Rucker. & Snyder. Richmond. (Arch. f. Intern. med. March. 1924.) 26) Scott (J. Exp. med. Nov. 1923.) 27) O. Moor. D. m. w. 50. 1924. 28) Gehrig. Zschr. f. Exp. Path. 7. 161. 1915. 29) Bohland. Centbl. f. inn. med. 20. 361 1899. 30) Achad & Loeper. Compt rend. d. I. Soc de Biologie 53. 217. 1901. 31) Maurel. Compt rend. Soc. de Biol. 55. 367. 1903. 32) Leake. J. A. M. A. Jnne. 3. 1922. 33) 西岸：慢性「モルフィン」中毒症ノ研究追加、滿洲醫學雜誌八ノ三。